真・怪人バッタ男 序章（プロローグ）

トライアルドーパント

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千差万別で十人十色な〝個性〟が溢れる雄英高等学校ヒーロー科に、圧倒的過ぎる存在感を醸し出す少年が一人在籍していた。

「これが将来の『相棒【サイドキック】』候補にして、プロヒーローの卵達。……アレ!?一人だけ怪人がいる!!」

これは、そんな異形の〝個性〟を持って生まれた少年が、怪人からヒーローへと至る物語の『序章【プロローグ】』である。

８／１９　最終話の後書きにある三択に対して、活動報告で受け付け場所を新設しました。ご意見お待ちしております。

９／２５　連載作品として、本編『怪人バッタ男　ＴＨＥ　ＦＩＲＳＴ』がスタートしました。よろしくお願いします。

２０１７／８／２０　ＩＦルートの投稿に伴い、章管理を変更しました。

目次

第1／3話　俺の恐さに、子供が泣いた！ ――――――――――――――― 1
第2／3話　強くてハダカで怖い奴 27
第3／3話　怪・人・野・郎 ――― 50
IF・怪人バッタ男　序章―Another―
2／3話　この世で怪人なのは、俺だけでいい！（泣） ――――――――― 76
IF・怪人バッタ男　序章―DARK SIDE―
2／3話　爆誕！　怪人王子！ 97
3／3話　私と戦い、『ワン・フォー・オール』を渡すのだ！ ――――――― 114

第１／３話　俺の恐さに、子供が泣いた！

　人は生まれながらに平等じゃない。
　それが僕、緑谷出久が齢四歳にして知った、社会の現実。
「や、止めなよかっちゃん！」
「ったく。幾ら負けても全然懲りねえんだなぁ、デク！」
「待てぃ！」
「あん？」
「悪い奴等は、許さないっ！」
　そしてこれが、僕のもう一人の幼馴染との最初の出会い。
「おいおい、ヒーロー気取りの奴がデクの他にも……」
「ヴヴゥウゥ……」
「「ん？」」
「GRYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！」
「「「ウワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！」」」

そしてコレが、僕の人生最大にして、最初に乗り越えたトラウマだ。

●●●

俺の名前は「呉島　新【くれしま　あらた】」。折寺中学校の三年生だ。

今は朝のＨＲ前で、俺は幼馴染と何時もの様にヒーロー談義に華を咲かせていた。今日のお題は本日デビューしたプロヒーローの事だ。

「それにしても巨大化って、スゲェ〝個性〟だな。もう速報でピックアップされてるぞ」

「うん、人気も出そうな凄い〝個性〟だよね！　だけどそれに伴う街への被害も考えると、今後は割と限定的な活動になるんじゃないかと思うんだ。そこら辺はこの〝巨大化〟の大きさが自在なのか、どうかで……」

この一見もさっとしたのが、同じクラスで幼馴染の「緑谷出久【みどりや　いずく】」。ヒーローオタクで、俺と同じくプロヒーローを目指している。出久の〝個性〟に関する分析力はかなりのもので、一度スイッチが入ると中々止まらないのが玉に瑕だ。とは言え、流石に担任の先生が来たことで朝のＨＲが始まるとなれば、流石に止まらざるを得ない。

「え～お前等も三年と言う事で、そろそろ本格的に将来について考える時期だ！　今か

ら進路希望の紙を配るが皆！　……大体、ヒーロー科志望だよね～」

『ハーーーーーーイ』

「せんせぇーーー！　『皆』とか一緒くたにすんなよ！　俺はこんな〝没個性〟共と仲良く底辺なんざ行かねーーーよ！」

　このチンピラみたいな奴は「爆豪勝己【ばくごう　かつき】」。出久と同じ俺の幼馴染なのだが、かなりの頻度で俺と出久に突っかかってくる。簡単に言うとコイツは「嫌な奴だが凄い奴」で、能力も才能も野心も負けん気も、その全てが人並み外れている。

　俺が初めてこの二人に出会った時は、三人のいじめっ子と二人のいじめられっ子と言う感じの現場で、その光景を目にした俺は正義感から介入したのだが、その結果5人全員が凄まじい泣き顔と悲鳴を上げて一目散に逃げ出した。まるで悪魔か殺人鬼にでも出会ったかのようなリアクションだった。

　それから幾許かの時間が過ぎ、俺が小学校に上がる頃には、俺は出久とよく遊ぶようになって、勝己とはよく勝負事をするようになった。

　出久に関しては、皆が出久を「ある理由」から馬鹿にしていた中、俺は出久の事を馬鹿にせず対等に接していたら何時の間にかそうなっていて、勝己に関してはずっと俺の事をライバル視している様な感じだ。特に1年生の頃に6年生に囲まれてボコボコにされていた勝己を助けたあたりから、勝己の俺に対する当たりが強くなったよーな気が

する。

「あ、そいやあ、爆豪と呉島と緑谷の三人は雄英志望だったな」

その瞬間、教室内の時間が止まった。

出久はこの世界では〝個性〟を持たない、所謂〝無個性〟と呼ばれる、この世代では珍しいタイプの人間だ。この〝個性〟と言うのは昔で言うところの超能力の様な物で、基本的には遺伝が大きく関係しているらしいのだが、出久は両親が〝個性〟を持っているにも関らず〝個性〟を持って生まれなかった。そしてこれがさっき言った、出久が周囲から馬鹿にされていた「ある理由」だ。

普通なら〝無個性〟と言う時点で、その人物はこの超人社会で絶対的弱者のレッテルを貼られ、スクールカーストの最底辺を生きる事を余儀なくされる。ましてや、ヒーロー科最難関の雄英高校を志願していると聞けば、嘲笑と共に馬鹿にされるのがオチだ。

しかし、このクラスは違う。只一人の例外を除いて、出久を表立って馬鹿にする人間は居ない。そして、その只一人の例外が早速突っかかってきた。

「オイオイ！　〝個性〟使ったら怪人かヴィランに見えるシンとぉ～、〝没個性〟どころか〝無個性〟のデクがぁ～、何で俺と同じ土俵に立ってんだ、あ〟ぁ〟ん〟!?」

そうそう、勝己は何故か子供の頃から俺を「シン」と呼び、出久の事を「デク」と呼

んでいる。俺の方はともかく、出久を「デク」と呼ぶのは止めろと昔から何度も注意しているのだが、勝己は１０年以上経っても止める気配が無く、俺も出久も半ば諦めている。

「ほぉ～～、それでお前はどうするんだ？　俺が怪人かヴィランならお前は仲間を呼んで、５人がかりで俺一人をやっつけるのか？　俺は別に構わないぜ？　お前等がちゃんと必殺技の準備を終えるまで攻撃しないで待ってるぜ？」

「てっ、てんめェ……ッッ!!」

「お、おい、シンさ……、いや、呉島。お、落ち着けよ。な？」

「ば、爆豪も、止めろよ。なあ？」

目から殺人光線を出しそうな勢いの勝己と、それをあえて挑発する俺。ある意味でこのクラスの名物なのだが、クラスメイト達は戦々恐々としている。

その理由は俺が持って生まれた〝個性〟にある。

俺は出久と違い〝個性〟を持っている。俺の〝個性〟は簡単に説明すると、人間にバッタの力が宿った「バッタ人間になる事が出来る」と言うものだ。コレは出久曰く、相当に強い〝個性〟らしいのだが、俺の〝個性〟にはヒーローを目指す上で致命的と言える欠点があった。

それは、俺が〝個性〟を使った時の見た目が、余りにも怖すぎると言う事。

普段の俺は甘いマスク（笑）の、メロンの様に高貴なイケメン（爆）なのだが、〝個性〟を使った時の俺は正に「怪人バッタ男」と言っても良い程に、グロテスクな見た目の異形と化してしまう。

実際に去年の職場体験学習で訪れた商店街で、プロヒーローによる子供向けのヒーローショーが企画されていたのだが、ちょっとした不手際で人手が足りなくなってしまい、俺が〝個性〟を使ってヴィラン役を務めた事があった。

しかし、俺がステージに上がった瞬間、子供達が示し合わせたかの様に一斉に、そして火山の噴火を思わせる凄まじい勢いで泣き出してしまい、俺は強制的にステージから退場させられ、何故か出禁まで喰らった。

他にもたまたまひったくりのヴィランに遭遇し、〝個性〟を使ってヴィランをひっ捕らえる事に成功した事があるのだが、その後駆けつけたプロヒーローはあろう事か俺を攻撃し、俺はそのまま警察に逮捕されてしまった。

幸い、監視カメラや被害者の証言によって冤罪は晴れたものの、「何処からどう見てもヴィランにしか見えなかった」と言うプロヒーローの言葉が一番辛かった。

自分の持って生まれた〝個性〟によって、そんな苦い経験をイヤと言うほど積んできた俺は、「相手が〝無個性〟だから〝個性〟を持つ自分に劣る」と言う考え方が嫌いだ。それは「どんな〝個性〟を持っているかで優劣を決める」と言う考え方に繋がっている

と考えるからだ。

しかし、〝無個性〟でも個性持ちより優れている所があるのだと思っている人間は少ない。だから〝無個性〟である出久も、当初は個性持ちのクラスメイトに馬鹿にされていた。俺はそんな勘違いした連中を目にすると必ず注意していたものだが、相手が素直に言う事を聞くとは限らない。特に不良やチンピラはその傾向が強く、そんな奴等は時として〝個性〟を使った実力行使を行う。

そんな時があれば俺は決まって、そんな事をする連中に必殺の「ホッパー・テラー」をお見舞いする。「ホッパー・テラー」とは、最もグロテスクな〝個性〟を使う瞬間を、相手の顔を押さえつけながら至近距離で強制的に披露し、その姿を相手の網膜と脳裏と精神に焼き付けると言う必殺技だ。その威力は泣く子も黙る所か、笑う子も泣き出しひきつけを起こした挙句、泡を吹いて気絶する。それでも効かない馬鹿野郎には、怒りの暴力「ホッパー・バイオレンス」でタコ殴りだ。

しかし、そんな活動を繰り返してきた結果、俺は何時の間にか周囲から「シンさん」と呼ばれる様になり、その内「折寺中の怪人」と言う有難くも無い渾名を頂戴し、挙句の果てには「バッタ人間になるのではなく、人間に化ける〝個性〟なんじゃないか」とか、「正体は人間に擬態した地球外生命体なんじゃないか」とか、そんな有らぬ噂まで立っていた。

「おいおい、二人とも落ち着け！　そんな事したら二人とも雄英に行けなくなるぞ!!」
「……チッ！」
クラスメイトだけでなく、担任が本気になって俺達を止めに入った為で、勝己は渋々ながらも自分の席に着いた。
まあ実際の所、勝己は5対1の集団リンチなんていう事は絶対にしない。勝己はチンピラ染みた性格をしているが、俺との勝負は必ず一対一のタイマンで挑み、卑怯な手段は決して使わない。そこら辺は勝己の信用も信頼もできる所なのだ。

●●●

放課後。全ての授業が終わった後、直ぐに学校の図書室に向かい、借りていた本を返却した後でまた新しい本を借りた。それから特に用事は無いので一人で家路に着いた所、どこかトボトボと歩く出久の背中を発見し、声を掛けようとしたその時、マンホールからヘドロの様な物が噴出して近くにいた出久に絡みついた。ヘドロの正体はヴィランだった。
「ッ!?　〜〜〜ッ!?」
「大丈〜夫。体を乗っ取るだけさ、落ち着いて。約４５秒。直ぐに楽になる」

　それの何処が大丈夫だ！　訳の分からない事を言うヘドロマンに怒りを覚えた俺は制服の上を脱ぎ、何とか脱出しようともがいている出久を助ける為に〝個性〟を使った。

「ヴヴッ……グワアアァァッツ!!」

　俺が〝個性〟を使う時、俺の体は急激な変化によって激痛に苛まれる。先ずは顔に血管が浮かび上がり、次に両目は深紅に染まる。眉の付け根から一対の触覚が突き出し、下顎が二つに割れる。最後に額から真っ赤な第三の眼が出現し、全身の筋肉が隆起した上で皮膚が緑色に染まる事で、俺はバッタ人間へと変身するのだ。ちなみに〝個性〟を使っている間、何故か俺はまともに喋る事が出来ない。

「URYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!」

「ん？　一体な……な！　何だアイツはぁあああああッツ!?」

　ヘドロマンは俺の姿を見て物凄く驚いていた。まあ、初見の奴は大体こーゆー反応をするので、俺にとっては何時もの事だ。そして、そんな動揺によって生まれた隙を利用して、此方の攻撃を叩き込むのも何時もの事だ。

「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

「ぐわあああああああ!?　なん……だ……!?」

俺はヘドロマンに狙いを定め、能力の一つである『超強力念力』をヘドロマンに叩き込んだ。正直この能力を体得した時はどう考えてもバッタの力ではないと思ったのだが、父さんは「本来生物は、科学では説明のつかない特殊な能力を秘めている」と言っていた。本当だろうか。

いずれにせよ、相手が流動的な体を持っていようとも、実体がある限りこの能力から逃れる術は無い。超強力念力のパワーによって気絶したのか、ベチャッとコンクリートの地面に叩きつけられたヘドロマンは、そのまま動かなくなった。

「GRUUUUUUU……」

「TEXAS……SMASH【テキサス・スマッシュ】!!」

「GUGYAAAAAAAAAAAAAAA!!」

ヘドロマンから解放された出久の無事を確認しようと出久に近づいた刹那、砲弾と錯覚するほどの強烈な衝撃が俺を襲った。

●●●

「いやぁ、本当に済まない事をした!　てっきりヴィランが子供を襲っていると思って

しまってね。何時もはこんなミスはしないんだが、オフだったのと慣れない土地で浮かれちゃったかな!?」
「はぁ……」
「しかし、コレは君のお蔭さ、ありがとう!!　無事、詰められた!!」
俺はか～な～り戸惑っていた。正直な話、ヴィランに間違えられる事は大した問題じゃない。〝個性〟を使えばそんな事はしょっちゅうだ。問題はその相手が「No.1ヒーロー」にして、出久の憧れであるオールマイトだったと言う事。お蔭で出久は緊張から物凄くテンパっている。しかし、サインがしてあると言うこのノートの焦げは、もしかして勝己の仕業だろうか？
一方のオールマイトはと言うと、さっき出久を襲ったヘドロマンを追っていたらしく、追いついたと思ったら見たことも無い怪人（つまり俺）が中学生を襲おうとしていた現場に遭遇、即座に拳圧で攻撃したとの事。
ちなみにヘドロマンは気絶している間に二本のペットボトルに詰められているのだが、オールマイトはどうやって詰めたのだろうか？　まさか素手で？
「じゃあ私はコイツを警察に届けるので！　液晶越しにまた会おう！」
「え!?　そんな……もう、まだ……」
「プロは常に敵か時間との戦いさ！　それでは今後とも……応援よろしく

ねーーーーーーーーーー」

力を溜めてジャンプし、爆発的な跳躍力でその場を立ち去ったオールマイト……の左足に出久がしがみ付いていた。

……え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝ッ!?

昔から妙に行動力がある奴ではあったが、流石にこんな事をするとは思わなかった。俺は急いで〝個性〟を使い、オールマイトと同じ様に渾身の力で地面を蹴り、背中からバッタの翅を生やして、出久とオールマイトを追った。

このバッタの翅は俺と同じ〝個性〟を持つ父さんには生えていなかったらしいが、俺は生まれた時にバッタの翅が生えていたらしい。今では任意でこの翅を出し入れする事が出来る。

こうしてバッタの跳躍力と飛行能力を駆使し、上空からオールマイトと出久を探した。間も無くビルの屋上にいる二人を見つけ、そこへ向かって急降下する最中、オールマイトの体から煙が上がった。俺が屋上に着地して煙が晴れた時、そこに居たのはガリガリに痩せている上に愛想の悪い、オールマイトによく似た金髪のお兄さんだった。

「え!?　ニセ!?　偽者!?　細ーーッ!!」

「GUUUU……」

「……私は、オールマイトさ。……ガフッ!」

「嘘だーーーーーーーーッッ!!」
「……あの、血い吐いてますけど、大丈夫なんですか？」
「ああ、問題無いよ。それとこれは……ほら、プールで常に腹筋に力入れている人がいるだろう？　アレと同じだよ」
「嘘だぁあああああああああああああああああああああああああッッ!!」
　出久は目の前で起こった出来事が信じられなかったらしく、絶叫した後で現実逃避をしている。俺の方は一先ず〝個性〟を解いて人間に戻ったが、オールマイトが吐血している事が心配だ。まあ、今の状態を説明するのに、変な例えを持ってくる位には余裕があるようだが……。
「……ウソだ……」
「……見られたついでだ少年達。間違ってもネットには書き込むな？」
「はい？」
　オールマイトが俺達二人に語ったのは、世間の知らないオールマイトの真実と、〝平和の象徴〟と言うNo.1ヒーローが背負った過酷な十字架だった。
「プロは何時だって命懸けだよ。『〝個性〟が無くとも成り立つ』とは、とてもじゃないがあ……口に出来ないね」
　オールマイトの言葉は重い。それは数多くの修羅場を潜り抜け、色々なモノを守って

きたからこその重さだった。
「……はあ……」
「……それじゃあ、『どんな〝個性〟を持っていても、ヒーローになる事は出来る』と思いますか？」
「……さっきから君達は、『ヒーローになる事』を目標にしているみたいだが、ヒーローになる事は〝始まり〟であって〝終わり〟では無い。プロヒーローを目指す上で大切な事は『自分がヒーローになって何をしたいのか』だ。
　人を助ける事に憧れるなら、警察官や医者と言う手もある。あれだって立派な人を助ける仕事だ。ヒーローと言う職だけがヒーローになる手段ではない。困っている人を助けたなら、その者は紛れも無くヒーローだと私は思う」
「……」
「別にプロヒーローを目指すなと言う訳じゃない。プロヒーローを夢見る事は、決して悪い事じゃない。だが……相応に現実も見なくてはいけないと言う事だ、少年」
　そう言ってオールマイトは立ち去った。出久の顔は絶望に満ちていた。
「……出久、帰ろう？」
「……うん」
　空気が重かった。何時もなら二人で帰る時は、活躍しているプロヒーロー談義で盛り

上がるのだが、この時ばかりはそうならなかった。
「……それ、もしかして勝己にやられたのか？」
「……うん。ちょっとね」
「「……」」
参った。こういう時こそ、友人として何か言うべきなのに、何と言えばいいのか分からない。神の如く憧れていたヒーローに「〝個性〟が無ければヒーローにはなれない」と、言われた〝無個性〟の出久に、〝個性〟のある俺は一体何と言ったら良い？
脳みそをフル回転させ、何かイイ台詞はないものかと考えながら歩いていたのだが、ふと気がつくとさっき爆発があった現場の近くまで来てしまっていた。どうやら無意識に何時もの様に、現場に来てしまったらしい。こんな時に見るのもなんだと思ったのだが、出久が現場に近づいていくので後ろから着いて行くと、何と暴れていたのはさっきのヘドロマンだった。
「!?　アイツ、何で此処に!?」
「……！　僕の……せい……！」
隣の出久がつぶやいた時、俺はヘドロマンが暴れている理由を理解した。恐らく出久がオールマイトにしがみ付いた時に、ヘドロマンが入ったペットボトルがポケットから落ちてしまったのだろう。そう言えば屋上に居た時、オールマイトのズボンにペットボ

トルが無かった様な気がする。
「つーか、あのヴィラン。さっきオールマイトが追っかけてた奴じゃね？」
「オールマイト!?　うそぉ!?　来てんの!?」
「じゃあ、何してんだ。オールマイトは!?」
ギャラリーがオールマイトの登場を期待しているが、それは無理だ。何故なら、オールマイトは活動制限によって動けない。俺ならヘドロマンを何とか出来るが、ここで俺が〝個性〟を使ったら確実にパニックが起きる。そして面白おかしく動画がネットにアップされ、最悪プロヒーローに逮捕される。
ここはあのヘドロマンに対して、有利な〝個性〟を持ったプロヒーローが来るのを待つしかない。
そう思って傍観していた俺だったが、人質になっていた中学生と言うのが何と勝己だった。ヘドロマンに捕われた勝己は、何時もの傲岸不遜で自信満々な目では無く、自分ではどうしようもない絶望に満ちた目をしていた。
次の瞬間、俺の隣に居た出久は飛び出し、俺はヘドロマンへの怒りから〝個性〟を使った。
「あのガキ……爆死――」
「URYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY

YYYYYYYY!!!」
『うわああああああああああああああああああああああああッッ!!』
「な、なんだアレは!?　新手のヴィランか!?」
「!!　来やがったか!!」
予想通りに群衆はパニックを起こし、プロヒーローは俺を新手のヴィランと勘違いし、現場は阿鼻叫喚の地獄と化した。
一方の出久に狙いを定めていたヘドロマンは、突如出現した俺の方へと狙いを変えた。それを見た出久は、鞄をヘドロマンに投げつけて隙を作り、無事に勝己の元へと辿りついた。
「ぬ゛ッ!?　だが、お前は後回しだ!!　喰らいやがれぇ！」
勝己を助けようとする出久をヘドロマンは無視し、ヘドロマンと勝己の個性が混ざった爆裂パンチが俺を襲った。
「SHIGYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
「!!」
「あっちゃん！」
「ハハハハ！　ざまぁみやがれ！　次はお前の――」

「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

　このバッタの肉体は高温に非常に弱い。しかし、勝己の〝個性〟はあくまで爆破であり、爆発によって「物を燃やす」と言うより、爆発の衝撃によって「物を破壊する」事に比重が置かれた〝個性〟だ。現に出久のノートも燃やしきれていないし、何度か勝己の〝個性〟を喰らっている俺の体が、その事を一番よく知っている。

　確かに爆炎も発生しているので油断は出来ないが、この手の攻撃の対処方法は既に俺の中で確立されている。

「JYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

「……は⁉」

　全身に絡みつき肉体を燃やし続ける炎を、俺は全身から超強力念力を発動して吹き飛ばし、更に火傷によって損傷した箇所を、『超回復能力』を用いて瞬く間に修復した。こんなプラナリア紛いの能力をバッタは持っていないと思うのだが、もう俺は気にしないことにした。

　そして「貴様だけは、絶対に……ゆ゛る゛さ゛ん゛ッ!」と言う感情が籠った、怒りの超強力念力を叩き込もうとしたのだが、突如ヘドロマンは取り込んでいた勝己を解放し、現場からの逃走を開始した。

「ヒィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッ!!　く、

来るなぁあああああああああああああああッッ!!　お、俺の傍に近寄るなぁああああああああああああああああッッ!!」

ヘドロマンは完全に怯えていた。しかしそんなヘドロマンに対して、容赦なく正義の鉄槌が下される時がやって来た。№１ヒーローのオールマイトの手によって。

「ＤＥＴＲＯＩＴ……ＳＭＡＳＨ【デトロイト・スマッシュ】!!」

吐血しながらも必殺技を繰り出したオールマイトによって、ヘドロマンはバラバラに砕け散った。必殺技によって起こった風圧によって上昇気流が発生したのか、現場には雨が降り出していた。右腕一本で天候を変えるほどのオールマイトの活躍によって、群集は歓声を上げてオールマイトを讃えていた。

終わった。そしてこの状況下なら上手い事逃げられるのではないかと思った俺は、その場を去るべく高く跳んだ。しかし、この場には一人だけ文字通り「違う視点」を持つヒーローが居て、彼女に俺の行動は筒抜けだった。

「デ・コ・ピンッ！」

「ＧＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!」

空中で逃げ場の無い俺は、巨大な中指によって文字通り虫けらの様に吹き飛ばされ、猛烈な勢いで地面に叩きつけられた。

●●●

「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！」
「あ～～、そんなに謝らなくても良いですよ。慣れっこですから」
本日二度目の気絶から目が醒めると、俺は警察病院に搬送されており、今日からデビューとなったＭｔ．レディが俺にひたすら謝っていた。
何でも彼女には、出久がヴィラン（つまりは俺）から逃げてヒーロー達に助けを求めた一般人に見えたらしく、俺とヘドロマンの戦いは「友達を助けに来た」と言うよりも「ヴィラン同士が獲物を奪い合っている」様に見えたとの事。そして、皆がオールマイトに気を取られている隙に立ち去ろうとした俺を目聡く見つけた彼女の手によって、俺は仕留められてしまったと言う訳だ。
今回の事件はオールマイトと出久、それに勝己が「俺がヴィランではない」事の証人になってくれたそうで、俺がヴィランである疑いは晴れたらしい。ちなみに制服はヘドロマンの爆裂パンチと、Ｍｔ．レディのウルトラデコピンによって消滅し、〝個性〟の解けた俺はほぼ全裸の状態で発見されたとか。
正直な話、〝個性〟を使ってヴィランだと誤認逮捕されるのは初めてじゃない。その

都度、誤認逮捕したプロヒーロー達と話す機会が得られるのだが、「だが、私は謝らない」とか「紛らわしい見た目で、紛らわしい事をするお前が悪い」と言ってのける輩がいた事を考えれば、彼女はとっても良心的だ。

「ところで、あのヘドロマンはどうしたんですか？」

「恐慌状態に陥っているらしいわ。何でも『刑務所の方が安全だ』って言ってたとか」

彼女の話によるとあのヘドロマンは、俺に報復する目的でたまたま遭遇した勝己を取り込み、「よし！　この〝個性〟ならオールマイトや怪人に勝つる！」と踏んでいたらしいのだが、それを正面から突破された事で心が折れたらしい。今では娑婆に出る事で俺と遭遇する事を恐れており、俺には二度と会いたくないと思っているらしい。

「……ねぇ。あたしが言うのも何だけど、貴方は自分の〝個性〟が嫌いじゃないの？」

「別に嫌ってはいませんよ？　確かに見た目で損する事の方が多いですけど、この〝個性〟のお蔭で出来た事も多かったですし」

「本当にそう？　別の〝個性〟なら良かったのにって思うこと無い？」

「……俺の〝個性〟は父親譲りで、父さんも昔はヒーローに憧れていたらしいんですが、色んな理由でヒーローになるのを諦めたそうです」

正直、見た目と言う点において、この〝個性〟は恐らく世界でも類を見ない程の恐怖を他者に与えるだろう。どんなに凄い事が出来ても、それらをぶっちぎりでマイナスに

してしまう圧倒的なルックスは余りにも致命的だ。

しかも、両腕に生えた棘の「スパイン・カッター」や、両手の爪「ハイバイブ・ネイル」。そして生え揃った牙である「ブレイク・トゥーサー」は、地球上に存在するあらゆる物体を切断することが出来る為、当時の科学技術では父さんのコスチュームを作る事が出来無かったのだと言う。

それらの理由から父さんはヒーローの道を諦め、科学の道に進んだ。同じ様な悩みと〝個性〟を持つ人間の助けになればと考えての決断だった。ただ、父さんの中ではずっとそれが足枷になっている様な気がするのだ。

出久のお母さんは出久が〝個性〟を持って生まれなかったことに責任を感じていたらしいが、俺の父さんは自分のバッタの〝個性〟を俺に受け継がせた事を後悔しているのだと思う。そうでなければ子供の頃に、「済まない、済まない……」なんて泣いて謝ったりはしないだろう。

「夢って言うのは、叶えられなくなったら呪いと同じです。呪いを解くには、夢を叶えるしかない。それなら俺はこの呪いを解いてみせる。この〝個性〟でプロヒーローになるまで、絶対に諦めないって心に誓ったんです」

「……私はね、自分の〝個性〟で色々辛い思いをしていたから、同じ様に自分の〝個性〟の所為で生きづらい思いをしている人達の希望になりたくて、ビッグなヒーローになろ

うって決めたの」

そう話すＭｔ．レディは、巨大化の〝個性〟を持つが故に、過去に高校進学を生まれ持った〝個性〟を理由に断られ続け、最終的には北海道の農業高校へ進学したらしい。

「『〝個性〟の所為で辛い思いをしている人達の希望』……ですか」

「ええ、『〝個性〟に苦しんでいる人達の希望の象徴』。それが私の目指すヒーロー像よ」

この時、オールマイトに言われた「ヒーローになって何をしたいのか」と言う、プロヒーローになる上で一番大切な事と、Ｍｔ．レディが語った彼女の目指すヒーロー像が、俺の中でジグソーパズルのピースの様にピッタリと嵌った様に感じた。

それは俺がプロヒーローと言うスタートラインに立った後で、俺がこの〝個性〟で目指すべきゴールなのではないかと。

「……俺も、それを目指して、良いですか？　自分の〝個性〟に苦しんでいる人達の、希望の象徴を」

「！　ええ、勿論よ。『相棒【サイドキック】』になりたいなら歓迎するわよ。なるとしても高校を卒業してからだけど」

その後、時間が遅くなった事を理由に、Ｍｔ．レディの相棒兼マネージャーが俺を家の近くまで車で送ってくれた。しかし、Ｍｔ．レディのヒーロー活動で発生した被害総額に関してブツブツ一人言を言っていたので、俺が高校を卒業する頃までに彼女がヒー

ロー活動をやっているのかどうかが心配になった。
色々と大変な一日だったが、俺の人生の明確な目標を見つけられたことを考えれば、かなり有意義な一日だった……と俺は思う。

○○○

デコピンで吹き飛ばされた呉島少年の様子を見ようと彼の病室を訪れた時、そのつもりは無かったのだが、彼とＭｔ．レディの会話を聞いてしまった。そして彼がヒーローを目指した原点と、彼が目標としたヒーロー像を知った。
あの場の呉島少年の無実は、私と緑谷少年と爆豪少年で証明したが、警察の塚内君から呉島少年の事について聞いた時は流石に驚いた。彼は何度か自分の〝個性〟を使って人助けをしているのだが、その時にヴィランと間違われ、プロヒーローに逮捕された経歴がある事を知った。
かつて、全てを統べる絶対的な巨悪の中から、一つの聖火の様に受け継がれる正義が生まれたように、超人を肯定する世界の光の中から、世界を脅かす闇が生まれる事もある。人は誰もが〝個性〟を選ぶ事は出来ず、その〝個性〟を持って生まれたが故に、悪に堕ちてしまった人間もこの超人社会には確かに存在する。

呉島少年の境遇は正にそれだ。実際にそんなヴィランを何人も見てきた私から見れば、どうして今までヴィランになっていないのかが不思議な位だ。

そう考えると、自分の行動が情けないと思わずにはいられない。ヒーローとしての活動時間を気にするあまり、ヴィランに襲われた緑谷少年を助けた呉島少年を、ヴィランと間違えて攻撃するとは！

考えてみれば、彼の様な人間は数え切れない程いるに違いない。これから私が赴任する雄英高校にも、そんな悲しみや闇を抱えている子がきっといる。しかも、この手の子は光が強くなればなる程、それに伴って闇もまた深くなる傾向がある。

そんな子供達を救えずして何がヒーローか！　いや、何が教師か！

元々は後継者探しを目的とした赴任だったが、これは私が教師として生きる為の第一歩だと思い至った私は、緑谷少年に『ワン・フォー・オール』を譲渡する為の肉体改造を目的としたトレーニングと同時に、呉島少年に対して何かしてやれないかとネカフェで調べ物をしていた。そして小一時間程経過した頃、コレはと思う記事を発見した。

その名も「自己肯定感を取り戻させるカウンセリング」。

振り返って見れば、私が間違えて攻撃した事を謝った時の呉島少年の目は、達観と諦観が見え隠れしていた。考えてみれば呉島少年は〝個性〟を使った時の自分の見た目によって、自分の善性や正義をずっと否定されてばかりだったのではないだろうか？

これはいけない。私が呉島少年にするべき事は決まった。後は方法を模索するだけだ。ふむ、効果があるのは、スポーツ、ゲーム、飼育体験、達成感、共感……か。

翌日。考えが纏った私は、早速呉島少年に会いに行った。

「私が来たーーーーーーーーッ!!」

「!?　オールマイト!?」

「呉島少年！　私と一緒にこの犬とジョギングしながら、連想ゲームをして遊ばないか？　あとこのサボテンもあげよう！」

「え？　あ、はい」

呉島少年の困ったような顔は実に印象的だった……と言っておこう。

第２／３話　強くてハダカで怖い奴

　オールマイトと犬と一緒にジョギングしながら連想ゲームで遊び、サボテンを貰った翌々日。俺はオールマイトと待ち合わせをしていた。
　場所は多古場海浜公園。海浜公園と名が付いているが、海流の問題で海岸には漂着物が多く、それにつけ込んだ不法投棄もまかり通っている為、地元住民でさえ寄り付かない実に辺鄙な場所だ。
「やあ！　待たせたな呉島少年！」
「おはようございます。それで、何故にこんな所で待ち合わせを？」
　元気にマッチョルックでやってきたオールマイトによると、このゴミ捨て場と化した海浜公園内の三つの区画の内一つに出久がいるらしく、昨日から出久はそこでオールマイトの指導の元、ゴミ掃除を始めているとの事。
　そして、今日から俺にもここで〝個性〟を使わずに、ゴミ掃除をして欲しいとオールマイトは言った。
「呼び出した理由は分かりましたが、何でこの海浜公園のゴミ掃除を？」
「ん？　それはアレだよ。理由は色々あるけど、一番は君が死なない為さ」

ＨＡＨＡＨＡ……と笑いながら、割ととんでもない事をオールマイトは言った。
「君の〝個性〟について聞いてみたけど、君の〝個性〟って相当に強力だよね？」
「ええ。ただ父さんが言うには、生物の進化の結果みたいな所があるらしいです。同じバッタの〝個性〟を持っている父さんとは違う点もそれなりにありますし」
「その中でも私が注目したのは、君の『超回復能力』だ。自己回復、或いは自己再生する〝個性〟は私も幾つか知っているのだが、この手の〝個性〟は決まって怪我の治癒と同時に体力を大幅に消耗する。そうなると怪我を治す事によって、逆に死ぬ事だってあるんだ」
「……つまり、俺自身の〝個性〟によって逆に死なない為に、今の内に体力を付けておこうって事ですか？」
「ＹＥＳ！　それに私の経験則から言わせて貰えば、君の〝個性〟は鍛えれば鍛えるほど鋼の様に強さを増すと見た。元になっている肉体の基礎能力を上げれば、必然的に〝個性〟を使った時の君の能力も上がる。これに同じ目標を持つ競争相手がいればお互いに張り合いが生まれる。正に一石三鳥って訳さ！」
「なるほど……って、ちょっと待って下さい？　そう言えばどうして出久はゴミ掃除をやっているんですか？」
「ん？　ああ、そうか、まだ説明していなかったね。実は先日、緑谷少年にも〝個性〟が

あることが判明したんだ」

なんと！　〝無個性〟だと思っていた出久にも〝個性〟があったとは！

驚く俺に対するオールマイトの説明によると、今まで〝無個性〟だと思われていた人が、何らかの切っ掛けによって、実は〝個性〟がある事が判明するケースも有るらしく、それによって分かった出久の〝個性〟は、火事場の馬鹿力的な増強系の〝個性〟なのだとか。

しかし、出久の〝個性〟は現時点ではかなりピーキーな〝個性〟であり、今の出久では〝個性〟に肉体が追いつかないのだと言う。

「それはつまり〝個性〟を使えば肉体が傷つくと言う事ですか？」

「その通り！　今の緑谷少年が自分の〝個性〟を使えば、彼の四肢はそれに耐え切れずに爆散してしまうだろう！　しかし、雄英高校はヒーロー科最難関！　〝個性〟を使わずに合格できるほど甘くは無い。そこで！　残り１０ヶ月で緑谷少年が〝個性〟が使える様に、体を鍛えあげようと言う訳さ！」

なるほど。つまり、俺は出久のカンフル剤の役割を期待されている訳か。そう言う事なら喜んで協力するが、何でオールマイトは出久や俺にこうまで親切にしてくれるのだろうか？　気になる所ではあるが、下手にその事を突っ込んでせっかくのチャンスを逃したくは無いので黙っていよう。

「それに最近の若いヒーローは〝派手さ〟ばかりを追い求めるけどね。ヒーローってのは本来奉仕活動！　地味だなんだと言われても！　そこはブレちゃあいかんのさ……」

確かに。勝己なんかは最終的にトップヒーローになって長者番付に名を連ねるとか、富と名声を求めてヒーローを目指している事を公言しているが、それを目的にヒーローを目指す奴は結構多いと聞く。

「この区画一帯の海岸線を、君達二人の手で蘇らせる！　それが君達のヒーローへの、第一歩だ！」

富や名声を目的としない、たった二人のヒーロー活動……か。なんだろう、不思議と胸が熱くなるな。

「それじゃあ、私はこれから緑谷少年の方を指導するので！　呉島少年も頑張ってね！」

ポーズを決めたオールマイトは嵐の様に去っていった。そして先日毒キノコ風にイメチェンし、ヴィランに間違われて逮捕されたシンリンカムイが、何故か大根ソードと風林火山フラッグを装着した奇妙な姿で涙を流していた。

彼の身に一体何があったのか非常に気になる所だが、俺も早速ゴミ掃除を始めよう。とりあえず近くにあったこの冷蔵庫からだ。

「うむっ！」

横たわっていた冷蔵庫を担ぎ上げ、俺は公園前に駐車してあると言うトラックの荷台

を目指した。

それから一人で黙々と作業を続けていると、昼頃になってオールマイトが様子を見に来た。オールマイトはトラックに満載されたゴミの山を見てから、俺にこう尋ねてきた。

「……呉島少年。ちょっと、調べさせてもらってもいいかい？」

「？　構いませんが？」

そう言うと、オールマイトは俺の体をぺたぺたと触ってきた。一体なんだと言うのだろうか？

「……呉島少年、もしかして普段からかなり体を鍛えているのかい？」

「ええ、鍛えてますよ？」

俺の〝個性〟は見た目がアレだが、学校では原則〝個性〟の発動は禁止され、野球やサッカー等のスポーツで〝個性〟を使う事は出来ない。

ならば、体を鍛えてそれなりの結果を出せば、〝個性〟を使った姿が人並み外れている所為で、周囲からキモがられている状況も変わるかも知れない。そもそも学校と言う閉鎖環境では、スポーツが出来る奴は基本的にヒーローだ。

その事に思い至った当時中学一年生の俺は、猛特訓による肉体改造を開始した。週末

は山に篭ったり、海に潜ったりした。山で偶然勝己に遭遇し、勝己の趣味が登山だと知った。そして、山にいる間の勝己は意外な事にとても大人しかった。

しかし、加減を知らない当時の俺は、ここで少しやりすぎてしまい、ふと気が付いた時には、俺の身体能力は常人のそれを遥かに凌駕していた。背中は鬼の貌の様な異様な状態になっており、〝個性〟を使わなくてもフツーに個性持ち相手に喧嘩で勝てる様になっていた。

そのお蔭で「やっぱり、アイツは人間じゃない」とか言われ、余計に避けられる様になってしまった。

「と、兎に角、このまま作業を続けてくれ給え。終わり次第、次の指示を出そう」

「はい」

その後、順調にゴミ掃除は進んでいき、中学生活最後の夏休みが始まる頃には、出久がいる区画以外の二箇所の区画の海岸線が復活した。

「予想以上にサクサク進んだが、何か変化は感じられるかい？」

「そうですね。１０m位の高さまでジャンプできるようになって、鋼鉄のシャッターを素手で引き裂ける様になりました」

「そ、そうか……。ではこれから〝個性〟を使った特訓を開始するとしよう！」

その日以降、オールマイトの特訓は徐々にエスカレートしていった。

簡単に言えば「〝個性〟を使った状態で、あらゆる負荷に耐える特訓」なのだが、オールマイトの手加減した殴る蹴るの暴行から始まり、山に行っていきなり断崖絶壁から叩き落されたり、鎖付きの巨大な鉄球をブンブン振り回して「さあ～、次はコレを受けてみろ～！」と言いながら巨大鉄球をぶつけられたり、オールマイトのパワーで物凄い勢いで回転させられたり、海に行ってオールマイトが起こした巨大な渦潮に放り込まれたりした。

最も辛かったのは、徐々に出力が上がっていくオールマイトの必殺技のオンパレードを真正面から受けた事。俺は〝個性〟を使うと全身が甲殻細胞に覆われ、その強度はセラミックの５倍を誇り、皮膚は攻撃に対する衝撃の７５％を吸収する為、打撃・斬撃に関わらず肉体本来の２５％以上のダメージを与えることは不可能らしいのだが、それでもかなりキツかった。

受験勉強の合間に行なわれたそれらは実に過酷で壮絶だったが、俺は全ての特訓を見事に耐え切った。

ちなみにオールマイトは「マイトビタミンＺ」と言うドリンク剤を差し入れに持ってきたり、出久のトレーニングよりも水着ギャル達とのパーティーを優先させたりと、割りとイイ性格をしている事が分かった。そしてネカフェに行くと言う割と庶民的な一

面も垣間見えた。
そんな長い様で短い様な、実に濃密な１０ヶ月があっと言う間に過ぎて、いよいよ『雄英高校　一般入試実技試験』が明日に迫っていた。
出久はちゃんと〝個性〟に耐えられる体へと、無事に仕上がったのだろうか？　いずれにせよ、俺達の運命は明日の成果で決まるのだ。

●●●

「いよいよだなぁ……」
「う、うん。いよいよだね……」
「シン！　デク！　俺の前に立つな、殺すぞ！」
「勝己」
「かっちゃん！」
出久と二人で雄英高校の校門付近で緊張していると、後ろから勝己が話しかけてきた。ヘドロマンの事件以降、勝己は俺と出久に全く話しかけてこなかった為、これが実に１０ヶ月振りの会話となる。
「はいはい、受験生は並んで。適当でいいから早くな。時間の無駄だ」

何だか小汚い風貌の男性が並ぶように指示を出したので、俺と出久は一瞬の内に勝己の前へと移動し、しれっと列に並んだ。
「前に立つなって言っただろうが！」
「はい、お前五月蝿い。帰らせるぞ」
「ぐっ……」
「「♪～」」
うむ。この１０ヶ月の間に、出久も中々にイイ性格になったようだ。
それから会場に向かう途中で出久がこけそうになった時、出久は物を浮かせる〝個性〟を持った、のんびりと言うかほんわかと言うか、そんな柔らかい印象の女の子に助けられた。
「お互い頑張ろう。じゃー」
「……あっちゃん」
「何だ？」
「僕、女子と喋っちゃった！」
「……そうだな」
出久の気持ちはよく分かる。〝無個性〟と言う事で女子からは恋愛対象として除外され、更にヒーローオタクである部分も好意的に受け入れられず、出久は小学校も中学

校も殆ど女子と接点が無かった。

かく言う俺も、ある意味で女子から（男子からも）キャーキャー言われる存在であり、女子とは碌に話したことがない。〝個性〟を使った俺の姿をみた女子は、誰も彼もが俺を怪物と呼び避けていくからだ。

かくして、意図せず非モテの道を邁進してきた俺達にとって、女子に話しかけられること自体が激レアイベントと化していた。

「縁起良いな」

「うん！」

とりあえず出久の緊張はほぐれ、やる気が漲っていた。予期せぬ出来事で出久は絶好調だったが、実技試験を説明する会場で試験官を見た俺は、栄光の未来を掴む為に必死になった。

「今日は俺のライヴにようこそーー！　エヴェイバディセイヘイ！」

「Ｙｏｋｏｓｏ――――――――!!」

「あっちゃん……」

「うるせぇ……」

試験官のプレゼント・マイクに反応したのは俺だけだった。我ながら完全にキャラ崩壊していると思うが、俺はプレゼント・マイクに好印象を持たれた方が良いと判断した。

何故なら、俺はバッタ人間になる〝個性〟を持っており、プレゼント・マイクは虫が大の苦手だ。それも気絶するレベルで。つまりは……そう言う事だ。

「ＯＫ！　こいつぁ、シヴィー！　受験生のリスナー！　実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!　アーユーレディ!?　ＹＥＡＨＨＨＨＨ!!」

「ＹＥＡＨＨＨＨＨ!!」

「イエス、アイムレディ！」

ムムッ。俺以外にも一人反応している奴が居る。反応したのはクソが付くほど真面目そうな、メガネの似合う男子生徒だ。こうしたノリに反応する様なキャラではなさそうなのだが……。

一方のプレゼント・マイクは、反応した受験生が二人だけでもハイテンションを維持し、実技試験の内容を説明していった。実技試験の内容は１０分間の模擬市街地演習で、装備品の持ち込みは自由との事だ。もっとも、俺の場合は全身が武器と言うか凶器と化すので、装備品等は必要無い。この肉体があればそれでいい。

「今気がついたんだが、俺達三人とも試験会場が違うな」

「同校のダチ同士で協力させねぇって事か」

「ホントだ。受験番号連番なのにね」

「チッ。五月蝿いテメェらを潰せねぇとはな……」

「……」

相変わらず勝己は物騒だった。仮に俺や出久が同じ試験会場だったら、迷わず真っ先に俺達へ引導を渡すつもりだったに違いない。

それにしても気になるのはあのメガネ男子だ。今の彼は見た目通りと言うか、予想通りにクソ真面目な質問をプレゼント・マイクにしていた。だとするなら、何故彼は俺と同じ様にプレゼント・マイクのノリに反応していたのだろうか？

……まさか、俺の考えに気付いたのか？　いずれにせよあのメガネ男子は只者では無さそうだ。

「かの英雄、ナポレオン＝ボナパルドは言った！　『真の英雄とは、自身の不幸を乗り越えて行く者』と!!　〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ【更に向こうへ】〟!!　それでは皆、良い受難を!!」

この後、プレゼント・マイクのこの言葉が示す様に、人生最大にして最悪の受難が俺を待ち構えていた。

●●●

実技試験が開始された直後。俺は出遅れたフリをして集団から離れ、建物の影に入っ

て服を全部脱ぎ捨て、誰も見ていない所で〝個性〟を発動させた。俺は基本的に怒りの感情で〝個性〟を発動させているが、別に〝個性〟の発動に怒りの感情が必要不可欠という訳では無いが、その場合は少し時間が掛かる。

（ちなみに、この時の両目が赤黒く染まった上に髪の毛が全て無くなり、眉の部分からバッタの触覚が生えて下顎が二つに割れ、額から第三の眼が発生して全身の筋肉が隆起しながら徐々に緑色の皮膚に覆われる光景は監視カメラでしっかりと見られており、プロヒーローたる先生方は悲鳴こそ上げなかったものの、グロテスクなバッタ人間への変身には流石に絶句していた）

何とかバッタ男への変身を完了した俺は、１００ｍを３．３４秒で走破する脚力を使って激戦区に突撃し、仮想ヴィランとの戦闘に入ろうとした所で……。

俺は受験生に攻撃された。

初めの方は確かに恐怖や驚愕から来る攻撃だった。しかし受験生の一人が『実はゲームの隠しボスの様な仮想ヴィランなのではないか？』と馬鹿な事を言い出した事がきっかけとなり、今の俺は半数近い受験生に包囲・攻撃され、仮想ヴィランに全く手を出す事が出来ない状況に追い込まれていた。

恐らく試験前に見た俺の姿と、〝個性〟を使った今の俺の姿が余りにもかけ離れている上に、俺が服を脱いで全裸になっている事で受験生だと思われなかったのだろう。そ

して試験がゲーム性の高い内容だったが為に、こんな勘違いが起きてしまったのだろう。

これで会話が出来るなら問題は解決したかも知れないが、俺は〝個性〟を使用している間は声帯がまともに機能しておらず、会話をする事が出来ない。こんな時を想定して手話を体得しているのだが、それを理解出来る受験生がこの場には居ない。

チクショウ！　これが見た目を気にして姑息な手段を取った報いか!?

ぶっちゃけ、オールマイトの特訓のお蔭でこの程度の攻撃は屁でもないが痛いことに変わりは無い。そしてこのままでは不合格が確定してしまう。様々な〝個性〟の攻撃を避けたり耐えたりする中、どうやってこの状況を打破するか考えていると、遂にお邪魔虫な０Ｐの仮想ヴィランが現れた。

デカイ。兎に角デカイ。しかし、お蔭で受験生の誰も彼もが逃げ出し、その場を一目散に立ち去っていく。

チャンスだ！　お前をお邪魔虫だってプレゼント・マイクは言っていたが、俺にとってお前は救いの神だ！

この千載一遇の機会を逃してなるものかと、早速一番ポイントの高い３Ｐの仮想ヴィランを探していると、どこからか助けを呼ぶ声が聞こえていた。パッと見た感じ声のする方には誰もいないのだが、よく見ると砂埃が人間らしい奇妙な形に歪んでいる。

そう言えば試験の前に、自分の体を透明化する〝個性〟を持った受験生がいた。しかし確かその受験生は女子だった筈。俺と同じ様に全裸になる事でその〝個性〟は真価を発揮するようだが、それは女子としてはどうなのだろう？

いずれにせよ、助けを求めているなら助けない道理は無い。例え、助けた相手に高確率で逃げられる様な容姿をしているとしてもだ。

悲鳴を上げられるのを覚悟して行動しようとした矢先、透明女子に何かが巻きついた。見てみるとカエルの様な女子が舌を２０ｍ位伸ばしている。彼女もまた透明女子のピンチに気付き、彼女を救出しようとしているのだ。うむむ、肝の据わった大した奴だ。

これで一件落着かと安堵し、再び３Ｐの仮想ヴィランを探そうと思った次の瞬間、カエル女子の舌の上に街灯の柱が倒れこみ、カエル女子の舌が挟まれた上に透明女子が地面に叩きつけられた。

「きゃあっ！」

「ゲロォオッ!!」

な、何イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッ!?

まさかの「誰かがピンチで助けに行ったら自分がピンチ」状態ッ!?　透明女子は叩きつけられた衝撃の所為か動けない！　カエル女子は舌を街灯に舌を挟まれて縮める事

ができない！　周りを見たが近くには俺以外に誰も居ない！　身動きが取れない二人に巨大な０Ｐの仮想ヴィランが迫ってくる！

どうする!?　透明女子を助けに行くか!?　それとも、街灯を起こしてカエル女子を助けるか!?

透明女子を助けに行けば、カエル女子が間に合わない！　街灯を起こせば透明女子の方が間に合わない！　仮に０Ｐの仮想ヴィランが助けなかった方を避けたとしても、身動きが取れない以上、今の様に破壊されたビルの瓦礫の餌食にならないとは限らない！

……ならば、二人を同時に助ける為に、俺がとるべき手段は一つ！

０Ｐの仮想ヴィランの進行を止め、その上で二人とも救出する！　もう、コレしかあるまい！　俺は０Ｐの仮想ヴィランに向かって、雄叫びを上げながら猛然と駆け出した！

(この時、カエル女子こと蛙吹梅雨と、透明女子こと葉隠透の二人は、後ろから巨大な機械仕掛けの仮想ヴィラン、前から怪物にしか見えないリアルヴィランが迫る「どう足掻いても絶望」な挟み撃ち状態を認識し、人生初の走馬灯を体験していた)

「WOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

助走を付けて地面を蹴り込み、驚異的なジャンプ力で一足飛びに接近した俺は、両脚で０Ｐの仮想ヴィランの鼻っ柱を思いっきり蹴りこんだ。そして更に上昇すると、背中

からバッタの翅を生やして位置を調整し、仮想ヴィランの真上に位置取った。
大きく突き出した右腕の「スパイン・カッター」の一つ一つが伸びて大型化し、巨大な一枚のブレードと化したソレを、渾身の力と圧倒的な速度で振り下ろした。
「ＳＨＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!」
更に「スパイン・カッター」で入れた切込みに、巨大なカッターをイメージした超強力念力を叩き込む。地面に着地すると同時に仮想ヴィランは縦に両断され、その場に沈黙した。
「ＧＲＲＲＲＲＲ……」
「な、何だよアレ……」
「あ、あんな奴に、敵う訳がねぇ……」
まだ俺を仮想ヴィランと思っているのか。とりあえず倒れた街灯を起こし、カエル女子の舌を解放する。挟まれた箇所が痛々しいが、適切な処置をすればちゃんと治るだろう。透明女子の方も何とか無事なようだ。
それにしても３Ｐの仮想ヴィランは何処にいる？　キョロキョロと探していると離れた所に３Ｐの仮想ヴィランを発見した。
『残り一分ッ！』

!!　不味い、残り時間はかなり少ない！　俺は手にしていた街灯を手早く切断し、巨大な一本の槍へと加工した。そしていざ、３Ｐの仮想ヴィランの元へと行こうとすると、何十人もの受験生達が此方に殺到してきたのだ。

「こうなりゃヤケだ！　攻撃するだけ損はねぇ！」

「そうだ！　諦めるのはやるだけやってからだ！」

俺をまだ仮想ヴィランとして扱うのかコイツ等は。この場に居れば下手をするとカエル女子と透明女子に流れ弾が当たると思った俺は、槍を抱えて高く跳んだ。

「WOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

「うおおッ!?　な、何だあの動きはぁあああああああああッ!!」

「撃て撃て！　撃ちまくれぇえええええええええええッ!!」

ビルを足場にした三次元的な跳躍で移動し、次々に放たれる〝個性〟の攻撃をかわしていく。そして上空約１０ｍの地点から、地表にいる3Ｐの仮想ヴィランに向けて全力で槍を投擲し、３Ｐシュートを狙った。

「DRYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

『終～～～了～～～～～～～～!!』

試験終了のアナウンスと同時に、３Ｐの仮想ヴィランは轟音と共に串刺しにされた。果たしてコレは得点になったのか？　微妙な所だが、やれる事は全部やった。ぶっちゃけ、たったの３Ｐじゃ焼け石に水っぽいが、無いよりはマシだろう。

そして試験終了の余韻に浸っている場合では無い、大急ぎでこの場を立ち去り、服を着なければならないからだ。

「ＷＯＯＯ

どうやら俺の行動は、彼女に全て見られていたらしい。とりあえず貰ったグミを口いっぱいに頬張った。

……ジューシー！　ジュジュジュジュジュ、ジューシィイイイイイイイイイッ!!

リカバリーガール・グゥミィイッ!!

「カイガン！」

美味いッ!!　何だか筆記も頑張れそうだ。

●●●

実技試験の後の筆記試験が終了し、俺と出久は二人で帰路に就きながら、それぞれの試験の出来を話し合っていた。それによると、出久は実技試験で思うように力を発揮できず、０Ｐの仮想ヴィランを破壊しただけで実技試験は終わってしまったらしい。

「そうか、お前もなのか……」

「え!?　あっちゃんもなの!?」

「ああ。『隠しボスみたいな仮想ヴィラン』だと間違われて、会場に居た半分位の数の受験生に袋叩きにされた」

「そ、そうなんだ……」

「一応、最後に３Ｐシュートをかましてやったけど、雀の涙みたいなもんだよなぁ……２０とか３０とか普通に聞こえたし……」
「……僕達、不合格かなぁ？」
「そうだな……筆記は手ごたえあったけど、実技が０Ｐじゃ無理っぽいよな。良くても『来年の筆記が免除』ってトコか？」
「……リアルな措置だね」
「そうだな。我ながらマジでそうかもな、ははは……」
「ははは……」
「「はははははははははははははははははははは……」」
俺達は意味も無く笑った。乾いた笑いだった。
それから不安な気持ちのままで時間だけが経過し、試験の結果発表の通知が間近に迫っていた。そして試験の結果もさることながら、この間に分かった事が俺達に暗い影を齎していた。
実技試験の時に０Ｐの仮想ヴィランとして投入された巨大ロボットだが、あれは「３微小振動感知」と「サーミスタ式熱感知」を併用した『高性能索敵機能』が搭載されており、非運用時は各国家機関に貸し出され、有事の際の可動型シェルター等としても使用される物なのだとか。その総工費は、一機につき２４００億円。これは軍事費の５％

を占め、我が国日本の国防設備の要と言える代物なのだ。

つまり俺と出久は、二人で軍事費の１０％をスクラップに変換してしまったのだ。正直、雄英高校の入学試験に合格して、その後でプロヒーローになれたとしても、誰も体験した事の無い未曾有の借金地獄に苦しむのかも知れない。

フフフ、借金ヒーロー「ホッパーキング」ってか？　全く洒落になら無いぜ。

将来への不安を、体を動かす事で何とか紛らわしていたが、遂に我が家の郵便ポストに雄英高校から試験の結果を知らせる封筒が届いた。封を開けると立体映像が展開され、スーツ姿のオールマイトが投影された。

映像の中のオールマイトが語ったのは、筆記と実技の試験結果。筆記の方はクリアし、実技の方は３Ｐ。何でもあの実技試験は、市井の平和を守る為に必要となる、情報力、機動力、判断力、そして戦闘力を『敵Ｐ』と言う形で数値化して見ていたらしい。最後の一発はちゃんとカウントされていたが、それでも合格ラインには到底届かない。

しかし、雄英が密かに審査制で見ていた、市井の平和を守る為に必要なもう一つの基礎能力があった。それは『救助活動Ｐ』と言う形で数値化され、『敵Ｐ』と『救助活動Ｐ』の二つの合計点で、実技試験の総合成績を決めていたのだと言う。

『合格だ、呉島少年。君はこのヒーローアカデミアで、自分の〝個性〟で苦しむ人達の〝希望の象徴〟を目指すんだ！』

「ッッ!!」

俺の心を満たしたのは、言葉にならない歓喜。そして出久と勝己の事が頭に浮んだ。実技試験が『敵Ｐ』と『救助活動Ｐ』の二つから判断されるのなら、二人はどうなったのだろうか……と。

先ず俺は出久に電話をした。受話器をとった出久と出久のお母さんは、二人とも凄い涙声で聞き取り辛かったのだが、出久も見事に合格していた。良かった。

しかし、そうなると勝己が心配だ。正直な話、勝己が誰かを助ける姿が、俺にはまるで想像する事ができない。下手すれば勝己は『敵Ｐ』しか獲得していない可能性がある。そこで試しに電話を掛けてみると、勝己のお母さんが電話に出たのだが……。

『ウチにも通知が来たんだけど、あの子「分からない」って。どう言うことかしら?』

……?

随分と勝己らしくない台詞だ。もしかして落ちたのかとも思ったが、勝己の性格からして、隠したり誤魔化したりするような事はしないだろう。だからこそ「分からない」と言う理由が余計に分からなかったが、その後学校で「三人とも合格した」と担任が言っていた事で、俺達全員が雄英高校に合格した事を知った。

俺達三人の腐れ縁は、まだまだ続きそうである。

第3／3話　怪・人・野・郎

桜が舞う四月。俺と出久と勝己の三人は、無事に雄英高校に入学した。

更に言うなら「腐れ縁」と言うヤツの力が働いたのか、俺が入る1―Aの教室に勝己がいた。教室にいる中で他に見知った顔がいないかと探してみれば、実技試験の説明の時のメガネ男子と、実技試験で同じ会場にいた透明女子とカエル女子がいる。

そして勝己はここでもチンピラキャラで通すらしく、メガネ男子こと飯田と言い争いをしているが、傍から見れば二人のやりとりは、ヤンキーの息子と口うるさいおかんのそれだった。

そうこうしている内に出久とほんわか女子が現れ、その後で入試の時に見た小汚い男の人が俺達の担任だと言う驚愕の事実が判明。そんな相澤先生の指示の元、入学初日に『個性把握テスト』と言う〝個性〟の使用を前提とした体力テストが行なわれる事と相成ったのだが、相澤先生は「このテストでトータル成績が最下位だったヤツを除籍する」と言いやがった。

「自然災害や大事故、身勝手なヴィラン達。何時何処から来るか分からない厄災。日本は理不尽にまみれている。そう言うピンチを覆していくのがヒーローだ。

雄英はこの三年間、こうしてお前等に受難と試練を与え続ける。〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ【更に向こうへ】〟さ。全力で乗り越えて見せろ」

う～む。俺としては〝個性〟を使う事自体は問題では無いが、一番グロいシーンであるバッタ人間へ変化する瞬間を、入学初日からクラスメイトに見せ付ける事になってしまう。それは高校デビューとしては最悪のスタートと言っていいだろう。

しかも今回は障害物がまるで無い為、誰にも見られない状況を作る事はまず不可能だ。それが出来るチャンスは既に逃してしまっている。

この状況をどうやって打開しようかと考えていたら、カエル女子が俺に話しかけてきた。

「ねぇ、ちょっといいかしら？」

「あ、ああ、え～っと、君は？」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんって呼んで、シンちゃん」

「シンちゃん？」

「ケロ？　私、何かおかしな事言ったかしら？」

「……いや、なんでもない」

シンさんと呼ばれ続けていた俺にとって、ちゃん付けはかなり新鮮だ。そして「女の子をちゃん付けで呼ぶ」と言う、ある種の憧れが現実のものとなるチャンスが舞い込ん

できた事に、内心で狂喜乱舞していた。
「それで、つ、梅雨ちゃんは俺に何か聞きたいがあるのか？」
「ケロ。私、思った事は何でも言っちゃうの」
「？」
「シンちゃんって、もしかしてあの時のバッタさん？」
「!?」
　何たることぞ。梅雨ちゃんは俺がバッタ男である事を看破した。
「……な、何でそう思った？」
「バッタさんがいた時にシンちゃんがいなくて、バッタさんがいない時にシンちゃんがいたからよ。半信半疑だったけど、当たったみたいね」
　つ、つまり、カマを掛けられたのか!?　いや、もしかしたらプレゼント・マイクの試験の説明の時に目立った事で顔を覚えられてしまい、同じ会場にいる俺が試験中に見当たらなかった事で気付いたのかも知れない。やはり、姑息な事を考えるべきではなかったか。
「次、蛙吹と飯田」
「ケロ。お互いに頑張りましょう」
　そう言って梅雨ちゃんは５０ｍ走をスタートラインに向かって行った。対する飯田

は足に〝個性〟が発現しているタイプで、本人は不満そうだが５０ｍを３秒０４と言うタイムを叩き出し、歓声が上がった。

しかし、俺は１００ｍを３．３４秒で走破できるので、この５０ｍ走に関しては余程の〝個性〟持ちがいない限り、誰にも負ける気がしない。もっとも、全く気が乗らないと言うか非常に憂鬱な事は間違いない。

こうして次々とクラスメイト達が自分の〝個性〟を工夫して５０ｍ走に挑戦し、独自の記録を打ち出していくなかで、先に５０ｍを終えた連中がワイワイと話し合っているのが聞こえてきた。

「そろそろ緑谷君の出番だな。入試の時に０Ｐの仮想ヴィランを倒した彼なら、凄い記録を打ち出すに違いない」

「ケロ。それならシンちゃんだって凄いわ。あの０Ｐの仮想ヴィランを真っ二つにしたもの」

「何っ!?　緑谷君以外にも、アレを倒した受験者がいたのか!?」

「何、何？　何の話？」

なんと言う事でしょう。俺と出久が入試の実技試験でやらかした事が、飯田と梅雨ちゃんの二人によって、クラス中に知れ渡ってしまった。話を聞いたクラスメイト達が、興味津々と言った目で俺と出久を見ており、唯一勝己だけが凄ェヤベェ顔でコッチ

を見ている。

……いや、待て。この状況を打破する方法を思いついたぞ。考えてみれば雄英高校の先生方は俺の〝個性〟を知っている筈だ。ならば、アレをこの場で披露すればどうなるかも分かっている。

ならば〝個性〟を使う瞬間だけでも便宜を図ってくれるかもしれない。そんな期待を込めて、俺は相澤先生へアイコンタクトによる意思疎通を試みた。すると、相澤先生は此方を見てから、やけに大きな独り言を言った。

「……遠慮は要らないぞ呉島。お前の〝個性〟はこのクラスの誰よりも強力だが、気後れする必要は全く無いからな」

ちくしょおおおおおっ！　クラスの皆が俺を見ているぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅッ!!

相澤先生のお蔭で、今まで興味なさ気にしていたクラスメイトの気まで引いてしまい、多くが「どんな凄い〝個性〟を持っているんだろう」と言う期待の眼差しを、どことなくデキる雰囲気のある連中は「どんな〝個性〟か見極めてやろう」と言う思惑が篭った視線を、そして勝己は殺意が篭った只ならぬ眼光を俺に向けている。

「次、呉島と緑谷」

来たか、審判の時が。相澤先生の方に目を向けると「お前、ここで〝個性〟使わなかっ

たら、分かってるよな？」みたいな目で俺を見ている。

……も、もう、やるしかねぇ。

俺は雄英での残り三年間の学校生活を、入学初日にして青春をドブに捨てる覚悟を決めた。高校デビューが桜の花弁の様に儚く散るのを幻視し、宣言通りに俺に受難を与えやがった相澤先生への怒り（私怨）を糧に、俺は〝個性〟を解放した。

「ヴヴ……ＵＲＹＹＹ

させた。両脚はバッタの様に折畳まれ、両手の爪を地面にめり込ませる。そんな独特の「クラウチングスタート」の体勢を取り、両脚に力を込めながら５０ｍ先のゴールラインを睨みつける。

「ＧＵＵＵ

「Ｅ――――――

〝ってヤツだ」

その当時の状況を1—A組の担任教師だった相澤消太はこう語る。

「入試の時も思った事だが、俺に言わせれば呉島の行動はヒーローを舐めているとしか思えん。一分一秒を争うプロの現場で、一々人目を気にして〝個性〟を使うなんざ、合理性に欠ける」

相澤消太は「見込みが無い」と判断した時点で、どれだけ好成績を出そうが出さなかろうが、容赦なく生徒を除籍する教師である。その「見込み」を判断する材料として、嘘をついたり煽ったりして生徒を追い込むのは、日常茶飯事だった。

50m走の後は握力、立ち幅とび、反復横とびと順調に続き、ハンドボール投げでちょっとした騒動があったがそれも無事に終了。更に上体起し、長座体前屈と進み、最後の持久走の時に〝それ〟は起こった。

相澤はそれまでの種目において、新と組む相手を新の〝個性〟に耐性の有る出久を当てていた。だが、持久走はそれまでの種目と違い、生徒全員で一斉に行なった。

ちなみにこの時、新は先頭の割と良いポジションで構えていた。誰も新を自分の背後に立たせたくなかったからである。

『位置について、ヨーイ……』

スタートを告げる「パァン!」と言う音が鳴った瞬間から、新は全力全開のフルスロッ

トルだった。瞬く間に集団を抜けてトップに立ち、凄まじいスタミナを有する新はトップスピードを維持しながら走った。新はあっと言う間にグラウンドを一周して二周目に突入し、まだ一周目の生徒達の背後へと迫った。

「その時に調べた呉島の一周目のタイムから、呉島の足は時速に換算すると約１０７ｋｍ／ｈって所だった。さて、ここでちょっと想像して欲しい。全身の筋肉を力強くもしなやか且つ俊敏に動かし、野獣の様な凄まじい咆哮を上げながら、時速約１０７ｋｍ／ｈの猛スピードで背後から迫ってくる、〝個性〟を使った呉島の姿を。

……想像したか？　ああ、その通りだ。きっとあの時は生徒の殆どが同じ事を考えていただろうさ。『取って喰われる』ってな」

５０ｍ走の時の新の動きは、一秒にも満たない一瞬の内に終わっていた。しかし、持久走の時は時速約１０７ｋｍ。それは高速道路を走行する自動車と同等であり、それは視認出来るからこその恐怖だった。

「正に地獄絵図だった。背後から迫る呉島を見てしまった生徒達は、様々な反応を見せた。恐怖に耐え切れずコースアウトした奴。ガタガタ震えながら地に伏せて頭を抱える奴。振り向いた瞬間に呉島と目が合って、泡を吹いて気絶した奴。そして、自分の〝個性〟を使って迫り来る呉島を攻撃した奴だ。まあ、攻撃に関しては大半が不可抗力だ。

二周目の呉島はクラスメイトに妨害されまくっていた。そして、攻撃を喰らった傍から呉島の体の傷は回復し、その様を見て更にクラスメイト達から攻撃が来る悪循環に陥っていた。たまに攻撃をジャンプしてかわしたりしたが、それはそれで『飛び掛って襲おうとしている怪人』にしか見えなかった」

弁護させてもらうなら、新は本気になって一位を取ろうと頑張っていただけだった。しかし傍から見れば新の姿は、「『バイオハザード』なんかに登場する、高速で動き回る追跡型クリーチャー」以外の何者でもなかった。

次々と生徒達がテストを放棄し脱落し、悲鳴と怒号と絶叫と慟哭がグラウンドに飛び交う中、〝個性〟がトップギアに至った飯田が遂に新と並んだ。

「まあ、飯田はそれまで５０ｍ走も反復横跳びも呉島に遅れをとっていたからな。せめて持久走では挽回したかったんだろう。全力以上の力を発揮し、残り６００ｍ程度になった所で、遂に飯田は勝負に出た」

飯田天哉の〝個性〟はふくらはぎにエンジンのような器官が備わっており、それによってとてつもない俊足を生み出している。しかし、５０ｍ走ではあらゆる意味で圧倒的な脚力に敗れ、なりふり構わず挑んだ反復横跳びでも新には敵わなかった。

その為、飯田は最後に行われる持久走に全てを賭けた。何としてでも足で新に勝つ為に、トルクオーバーを引き起こしてトルクと回転数を無理矢理底上げし、約１０秒間の

爆発的な超加速を可能とする「レシプロ　バースト」の使用に踏み切った。使用後は反動でしばらく〝エンスト〟するが、これが最後の測定なので問題は無い。

「必死に食らい付く呉島だったが、飯田との距離は縮まる所か広がるばかりで、飯田がこのまま逃げ切るかと俺を含めた誰もが思ったその時だ。

呉島の腹が光ったと思ったら頭に輝が入り、呉島は走りながら『脱皮』した。『脱皮』する前がトノサマバッタだとするなら、その時の姿はショウリョウバッタって感じの鋭角的なフォルムだ。

もっとも、ソレが見えたのはほんの一瞬で、呉島は文字通り目にも止まらぬスピードでグラウンドを走り、一秒にも満たない一瞬で飯田を追い抜いてゴールしたんだ」

飯田はその時、ゴールまで残り５０ｍと言う所まで来ていた。しかし、この時の新は通常を遥かに上回る超高速を発揮し、持久走でも一位を獲得した。飯田はしばし呆然としていたが、自身の敗北を素直に認め、お互いの健闘を讃えようと新に近づいた所で、新に異変が起こった。

「呉島の〝個性〟については、個性届で事前に確認していた。あの『脱皮』に関しては恐らく、呉島の『あらゆるエネルギーを吸収して進化する特性』が発揮された結果だろう。だが、急激な進化は体に大きな負担を与えたようで、呉島は胸を押さえながら苦しそうなうめき声を上げてその場に倒れた。そして、それと同時に〝個性〟も解けた」

実は新が『脱皮』をした際、体操服も一緒に脱皮する様に脱げていた。そんな状態で〝個性〟を解いたらどうなるだろうか？

答え：全裸になる。

その有様を近くで見ていた飯田は動揺し、クラスメイトの恐怖とは違う悲鳴が上がった。そして相澤は冷静に、創造の〝個性〟を持つ八百万に体操服を作るように頼んだ。ケツ丸出しで倒れる新に合ったサイズの体操服を……だ。

その後、すぐに新は復活したが、持久走の記録は半分以上の生徒がその場から逃げ出した為、〝記録無し〟の生徒が大半を占めた。記録を出せなかった生徒達はやり直しを要求したが、「それなら呉島君にもやり直す権利がある」と飯田が主張し、代えの体操服を着た新に意見を求めた。

『呉島君！　君だってそう思うだろう!?　これではフェアな記録とは到底言い難い！』

『……いや、俺はこれでいい』

『!?　何故だ！　理由を聞かせてくれ！』

『相澤先生が言っていただろう？「この世界は理不尽にまみれていて、そう言うピンチを覆していくのがヒーローだ」って。

だから俺は「これは俺がヒーローになる為に必要な事」だと受け取った。その結果がコレだ。だから、俺はコレで良い』

飯田を含め、その場にいた全員が衝撃を受けた。仮に自分が同じ状況下に置かれたとして、果たしてこんな事が言えるだろうか？　いや、間違いなく文句を言うだろう。

お前等一体、何してくれてんだ……と。

その後、相澤の「プロヒーローの現場に『やり直し』なんてものは無い」と言う、ごもっともな言葉も相まって、『個性把握テスト』は奇妙な形で幕を閉じた。

しかし、相澤にとって最も恐るべき事態は、この後になって訪れた。

「俺が『〝最下位は除籍〟ってのは、生徒の最大限を発揮する為の合理的虚偽』って言った時だ。緑谷の隣にいた呉島が絶叫しながらバッタ人間に変身したと思ったら、こめかみがピクピク痙攣し、真っ赤な目玉をぎょろぎょろさせて、俺を凝視しながら唸り声を上げたんだ。……ああ、あの時は流石に少しヤベェと思ったよ」

死ぬ？　殺される？　いや、むしろ喰われる？

何故か私服姿の自分が野原で為す術なく食われる光景が相澤の脳裏をよぎったが、新は相澤を憤怒の形相で睨みつけているだけだった。

「その後どうしたって？　緑谷にこの後ばあさんの所に行く様に伝えて、その場で解散したよ。次の日の朝のＨＲは滅茶苦茶行きたくなかったけどな……」

後にも先にもアイツ以上に恐怖を覚える生徒は現れないだろうな……と、相澤消太は心から思った。

●●●

全ての体力テストが終了し、今日はもう帰るだけ……となっていたのだが、俺は出久とクラスメイトの切島の治療が終わるのを待っていた。待っている間に考えているのは、今日の持久走で起こった出来事だ。

持久走で飯田に追い抜かれ、何とか距離を縮めよう足掻いたが、どうしても飯田に追いつくことが出来ない。それどころか距離をみるみる離されていく。向こうは足に〝個性〟が現れているタイプだが、此方も足にはかなり自信があるのだ。正直負けたくない。

もっと早く！　いや、誰よりも速く走ることが出来たら……ッ!!

俺が心の底からそう願った瞬間、不思議な事が起こった。

腹のへその部分に存在する黄色い玉が突然光り輝き、俺の体を得も知れぬ大きな力が突き抜けていく感覚が襲った。そして、自分の殻を脱ぎ去った様な感触がした直後、俺の体は羽根の様に軽くなり、今までとは全く違った高速のヴィジョンが視界に飛び込んできた。周囲がスローモーションに見えるほど超高速で走る事が出来る様になった俺は、瞬く間に飯田を追い越すと、持久走でも一位を獲得する事に成功した。

しかし、完走した後の俺は今まで体験した事の無い激痛に苛まれ、倒れて気絶すると同時に〝個性〟も解けた。正直〝個性〟が解けただけなら問題は無かったが、この時の俺は本当に自分の殻を脱ぎ去っており、その時に体操服も一緒に脱げていた。

それはつまり、〝個性〟が解ければ全裸になると言う事。

かくして、俺は総合1位の代償としてクラスメイトにトラウマを植えつけ、最後にはケツ丸出しの醜態を晒すと言う、衝撃的な高校デビューを飾ったわけだ。……ヤベェ、涙が出てきた。

そして「最下位は除籍」が嘘だと知った時の衝撃と怒りによって〝個性〟が発動し、一瞬でバッタ人間になった時は周囲が物凄く緊張していたが、それは些細な事だ。別に相澤先生を取って喰おうだなんて考えもしてないぜ。

制服に着替える為に更衣室に行こうと思ったその時、一人の男子が俺に近づいてきた。

「よッ！　総合一位とか、先生が言う通りスゲェ〝個性〟だな！」

「ＧＲＲ？」

「俺か？　俺は切島鋭児郎だ！　これから一年よろしくな！」

切島はそう言うと俺に握手を求めてきた。このバッタ人間の姿の俺に対して、よろしくと言いながら握手を求めた人間は皆無だ。若干の感動を覚えた俺は勢いよく頷き、快

く握手に応じた。
「うおおおおおおおおおおおぉッッ!?」
「気をつけて！　その爪は『ハイバイブ・ネイル』と言って、何でも切り裂けるんだ！」
「ヘッ!?　へ……平気だ、こんなもの！　お、おおおおおおっ!?」
「その腕の棘は『スパイン・カッター』と言って、何でも切り裂けるんだ！」
「（何でも切り裂ける所、多過ぎじゃね!?）何の……耐えて、見せるッ!!」
切島は歯を食いしばって必死に耐えていた。何という男だ。この切島という男は、俺の〝個性〟を真正面から受け止めるつもりなのだ。その心意気に感動した俺は、なんとかこの感動を切島に伝えたいと思い、そして閃いた。
この状態では言葉で感動を伝える事は出来ないならば、行動で伝えれば良いのだと。
「ぐわあああああ！　肩！　肩！　痛ッ！　え、ちょ!?　待て、抱擁は止めろ！　ちょッ、まっ……ア〜ーーーーーーーーーーーッ!!」
……うん。感極まって切島には悪い事をしてしまった。その後で理由を話して謝罪すると、切島は快く許してくれた。切島はとても良い奴だった。
こうして、黒歴史と化した『個性把握テスト』を振り返っていると、保健室から二人が帰ってきた。せっかくなので今日は三人で帰ることにした。
「何にしてもクラスの誰も除籍にならなくて良かったな」

「うん。でも、多分普通にやってたら、僕が最下位だったと思うな」
「それよりも俺は、峰田が爆豪に一体何を言ったのかが気になるぜ」
「勝己のアレか……」
「峰田君、かっちゃんに酷い目に遭ってたよね……」
　それはハンドボール投げで出久が例のピーキーな〝個性〟を使い、７００ｍ超えの記録を出した後の事。その時に勝己が峰田に何か言われたようなのだが、それに勝己がマジギレして峰田をフルボッコにしていた。ボコボコにされた峰田曰く「よく分からないけど、予想の２５０倍位キレられた」らしいので、峰田の方に原因があるっぽいが、一体どんな事を言ったのだろうか？　聞いてみたいが、聞いたら聞いたで勝己がまたキレそうで怖い。
「緑谷君に呉島君に切島君、今から帰りかい？」
「ああ、二人の治療が終わったからな」
「そうか。しかし、呉島君。今日の僕は君に負けたよ。完全敗北だ。いや、足なら誰にも負けないと僕も少し驕っていた。君のお蔭で、上には上がいると目が醒めた。ありがとう」
「？　どういたしまして」
「それにやられたと言えば、相澤先生もそうだ。俺は『コレが最高峰！』とか思ってし

まった。教師が生徒を嘘で鼓舞するとは……君達はどう思ったんだい？」
「俺はどんな無理難題でも、何時でも受けて立つぜ！」
「俺は正直ふざけんなって思ったな」
「ぼ、僕は……」
「お～～い、皆待って待って～～！」
「ん？　君は無限女子。それに君達は……」
「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんって呼んで」
「私は葉隠透だよ。よろしくね」
　なんと言う事でしょう。ここで更にほんわか女子の麗日と、梅雨ちゃんと、葉隠が加わり、合計７人の大所帯となった。ここで「シン」というのが渾名で本名が新だと皆に教えたのだが、そのまま「シン」で通した。出久も「デク」で通すらしいし、その気持ちは分かる。
　しかし、飯田も彼女達も何と言うか……普通だ。出久以外の誰もが、俺を恐れもしなければ、怖がりもしてない様に見える。
　……まさか、受け入れられているのか!?
　世の「自分が正常である」と信じきっている、異常な正常者共の正気の沙汰によって異端の烙印を押され、迫害され続けてきたこの俺が!?　人々から後ろ指を指され、恐れ

られながらも忌み嫌われる存在であるこの俺が!?

試しに電車で出久と距離を置いてみたが、俺の両隣に一人分以上の隙間を空ける事無く、普通に切島と梅雨ちゃんが腰を下ろしている。……いや、もう少し様子を見よう。

「……ちょっと気が早いとは思うんだが、自分のヒーロー名とかもう決めてたりする?」

「それなら俺はもう決まってるぜ！　剛健ヒーロー『烈怒　頼雄斗【レッド　ライオット】』だ！」

「それってもしかして、漢気ヒーロー『紅　頼雄斗【クリムゾン　ライオット】』のオマージュ?」

「おお！　知ってんのか緑谷！　ちょっと古いんだが、俺の憧れるヒーロー像が『紅　頼雄斗【クリムゾン　ライオット】』なんだよ！」

「私は梅雨入りヒーロー『ＦＲＯＰＰＹ【フロッピー】』よ。子供の頃から決めていたの。シンちゃんは?」

「……へ、変身ヒーロー『ＭＡＳＫＥＤ　ＲＩＤＥＲ【仮面ライダー】』」

「?　それってどんな意味があるの?」

「父さんが昔考えた自分のヒーロー名だ。何でもコスチューム着た上でバイクに乗ってヒーロー活動をするつもりだったって言ってた」

「なるほど。お父さんの意志を継ぐと言う訳か。そうなると、在学中にバイクの免許取

るつもりなのかい？」
「ああ、二年生の時にある『ヒーロー活動認可資格仮免』に合わせて取るつもりだ」
「バイクに乗る必要は無さそうだけどね～」
「確かに！」
普通に皆と会話が成立し、場が盛り上がっている。
……永かった。本当に永かった。
男子にも女子にもある意味でキャーキャー言われていた俺にとって、恐怖の悲鳴こそが今までの学校生活を象徴する暗黒の賛美歌だった。そんな光無き学校生活のどん底で巻き起こる、想像を絶する苦しみの連続。
自分の〝個性〟を怨んだ事は一度も無いが、あえいでいくしかなかった永い年月の中で、叫び！　吼え！　呪い！　嘆き！　のたうち！　未来への栄光と、爽やかな学校生活を夢見ながら、どうすればあんな風に男女混合で楽しく過ごせるんだろうと、人知れず枕を濡らしてきた。
しかし、そんな今までの苦難も、此処まで来れば安いものよ！　ふはははははははは！　此処までくれば安い安い！
「そ、それじゃあ、僕達はここで降りるから」
「そうか、ではまた明日学校で会おう！」

おっと、もう降りる駅に着いたのか。楽しい時間が過ぎるのは本当に早いな。
「それじゃあ、ここでさよならだな」
「おう！　また明日な！」
「シンちゃん、緑谷ちゃん、また明日」
「デク君、シン君、またね～」
「バイバ～イ」
なんて気のいい奴等なんだ。俺と出久は電車に手を振って、駅に降り立った。そして電車の窓からも手を振っていたので、俺達は電車が見えなくなるまで手を振っていた。
「……あっちゃん。僕、雄英に合格して良かったって、心から思うよ」
「ああ、俺もだ……」
「友達も出来て、女の子といっぱい話しちゃった」
「そうだな。……これからコーラで祝杯をあげようと思うんだが、お前もどうだ？」
「……そうだね、今日位は……良いかな？」
「今日位は……今日位はいいだろう……」
これまで俺達は、毎日の様に見えない何かに敗北を喫したまま家路についていたが、今日は初めてその何かに勝った様な気がした。
勝利の美酒として二人で煽ったコーラは、何時もよりも何十倍も美味かった。

●●●

昨日の放課後は今までに無い、未体験ゾーンな下校によってハイテンションになっていたが、代えの体操服を作ってくれたと言う八百万は俺を見る度に目を逸らし、俺の後ろの座席の口田は虫が苦手だそうで、俺が後ろを振り向く度にビクビクしている。

個性把握テストの総合一位の代償は決して小さいものでは無かったが、今までとは違った意味で、どこか一目置かれている様な感じがするのは気のせいだろうか？

そして今日から本格的に始まる雄英高校のカリキュラムは、午前中は通常の高等学校と同じ必修科目の普通の授業。午後からがヒーローの素地を造る為のヒーロー基礎学だ。

本日はオールマイトの指示の元で行なわれる戦闘訓練で、それぞれが専用のヒーローコスチュームを着用して、入試の時に使ったグラウンドβに集合する。

ところで雄英高校には「被服控除」と言う、要望する機能とデザインを学校に提出すると、各生徒専用となる最新鋭のヒーローコスチュームを学校のサポート会社が用意してくれる素敵な制度があるのだが、今回俺に用意されたコスチュームは「被服控除」によって造られた物では無い。

バッグの中に入っていたのは、黒を基調とした所々にプロテクターが装着されているライダースーツ。ブルーグリーンのブーツとグローブ。薄手の深紅のマフラー。中央に風車が付いた大きなベルト。そして、バッタを模したフルフェイスのヘルメット。

これが俺のヒーローとしてのコスチュームだ。

「わあ！　あっちゃんのコスチューム、凄くカッコイイ！　それあっちゃんがデザインしたの？」

「いや、コレは父さんが造ったものだ。多分、父さんが身につける筈だったコスチュームのデザインなんだと思う」

「そうなんだ……実は、僕のコスチュームも母さんが用意してくれたものなんだ」

「そうか。お前もしっくりと馴染んでいる感じで似合ってるぞ。それと、このコスチュームには驚くべき機能がある」

「え？」

ヘルメット以外の全てを身につけた俺は〝個性〟を発動し、バッタ人間の姿となる。通常なら着ている服の袖が破けたりするものなのだが、このコスチュームはそうならなかった。両手足に装着したグローブとブーツは、「スパイン・カッター」や「ハイバイブ・ネイル」を外に突き出す事無くその形状を保っている。

そして俺はバッタを模したヘルメットを被り、「クラッシャー」と呼ばれる口の部分を

嵌め込んだ。カチッと鳴る音がどこか心地良い。
「どうだ？　俺の声がちゃんと聞こえるか？」
「!!　うん！　ちゃんと聞こえるよ！」
そう。このコスチュームを着ていれば、〝個性〟を使った状態でも喋る事が出来る様になるのだ。声には若干のエコーが掛かっているが、それ位は全く問題にならない。他にも色々な機能があるようだが、それはおいおい使っていこう。
「……なあ、出久。もしかして、着替え終わっていないのは俺達だけか？」
「え？　あ！　本当だ！　急ごう、あっちゃん！」
出久と共に急いで演習場に向かいながら、俺はそっと右手でヘルメットに触れて、父さんがこのコスチュームのデザインを見せた時を、自分がかつて考えたヒーロー名を教えてくれた時の事を思い出す。
変身ヒーロー『ＭＡＳＫＥＤ　ＲＩＤＥＲ（仮面ライダー）』
それはきっと、誰しもが一度は心に思い描く、普遍的で理想的な存在。力無き弱者が理不尽な暴力を前にし、ただ涙を流すしかないと言う絶望的な状況で、誰よりも速く『騎士【ライダー】』の如く駆けつける――。
父さんも嘗てはそんな『騎士【ライダー】』を目指し、『英雄【ヒーロー】』になる事を夢見ていたのだと思う。

「格好から入るってのも大切な事だぜ少年少女！　自覚するのだ！　今日から自分は……ヒーローなんだと！」

既に俺達以外の全員が、コスチュームを着た状態で集っていた。ちなみにフルフェイスの顔が完全に見えないコスチュームを着ているのは、俺と出久の他には二人。消去法で考えるなら、二人の内一人は飯田だ。

「良いじゃないか皆、カッコいいぜ!!　それじゃあ、始めようか有精卵共!!　戦闘訓練のお時間だ!!」

言い忘れていたが、これは俺が一つの呪いを解き、一つの理想を目指す。そんな『物語』が始まる為の『序章【プロローグ】』だ。

――完――

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

『怪人バッタ男　ＴＨＥ　ＦＩＲＳＴ』

ＩＦ・怪人バッタ男　序章ーＡｎｏｔｈｅｒー
２／３話　この世で怪人なのは、俺だけでいい！（泣）

もしも『ワン・フォー・オール』を受け継いだのがシンさんだったら？

●●●

自分の目指すべき道が見えた、ヘドロマン事件の翌日。俺は学校で興奮状態の出久から、無個性のままでヒーローを目指す夢を改めて語られ、出久が考案したヒーローアイテムの意見を求められた。

出久は徹夜しましたって感じの血走った目で、俺に懇切丁寧にヒーローアイテムの概要を語っていたが、俺にはよく分からないので、今度出久に父さんを紹介してみようと思う。

そして学校から帰宅する俺の目の前に、オールマイトがサボテンを持ちながら犬を連れた状態で現れ、俺はオールマイトとジョギングをしながら連想ゲームで遊ぶと言う、なんとも不思議な時間を過ごしていたのだが……。

「ところで呉島少年。昨日は聞かなかったが、君にはプロヒーローと言うスタートラインから目指す、明確なゴールのヴィジョンはあるのかい？」

誰も居ない海岸に到着した所で、いきなり連想ゲームを中断したオールマイトの質問に対して、俺は昨日のＭｔ．レディとの会話で定めた自分の目指すべきゴールを話した。

生まれ持った〝個性〟の所為で生き辛い思いをしている人達の〝希望の象徴〟を目指すのだと。

「そうか……。君なら、私の〝力〟を受け継ぐに値する……」

「はい？」

「これは提案だよ、呉島少年！　この超人社会の〝希望の象徴〟を目指す君に、超人社会の〝平和の象徴〟を兼任してみないかと聞いているんだ！　……ガフッ！」

「本当にソレ、大丈夫なんですか!?」

テンション高めに吐血すると言う離れ業を見せつつ、ムキムキのマッスルフォームから、ガリガリのトゥルーフォームへと姿を変えたオールマイトの言葉に疑問が浮ぶ。

「私の〝力〟を受け継ぐ」とは一体どう言う事なのだろうか？

「そんな事より、今は私の〝個性〟の話だよ、呉島少年。それは弱き者の助けを求める声と、強き者の義勇の心が紡いで来た『力の結晶』！　超人社会の影で営々と鍛えられ、

脈々と受け継がれてきた、誰も知らない『正義の系譜』！　その力に冠された名は……『ワン・フォー・オール』！　まあ、この提案を受けるか受けないかは君次第なんだけど……」

夕暮れに染まった海岸で、俺は「世界七大不思議」の一つに数えられ、普段なら爆笑ジョークなんかでお茶を濁して終わる「オールマイトの〝個性〟」に関する事を、オールマイト本人から聞かされていた。

オールマイトの言葉はウソではないだろう。そして、俺はある疑問をぶつけてみた。

「……その前に、一つだけ聞かせて欲しい事があるんですが、良いですか？」

「何だい？」

「さっき『ワン・フォー・オール』は引き継がれる〝個性〟だって言いましたよね？　それなら、オールマイトは受け継ぐ前から何らかの〝個性〟を持っていたんですか？　それとも、〝無個性〟だったのですか？」

「！　中々鋭いな、呉島少年。察しているとは思うが、私が先代から『ワン・フォー・オール』を受け継ぐ前は、私は〝無個性〟だった。君達の世代程じゃないけど、珍しい部類の人間だったよ。

ただ、先代は『ワン・フォー・オール』の他にも〝個性〟を持っていたから、『ワン・フォー・オール』を受け継ぐのは〝無個性〟の人間じゃなきゃいけないって訳じゃない」

「では何故、俺に？」

出久と同じく〝無個性〟ならば、出久が次の継承者として選んでも良かったのではないかと思うのだが……。

「……確かに、私は君の他にも緑谷少年を候補に入れていた。しかし、『ワン・フォー・オール』はあくまで〝身体能力を付与する〟ものであって、それを発揮する〝肉体を形成する〟訳では無い。下手な人間が受け継いでしまうと、その力を肉体が抑えきれず、四肢がもげて爆散してしまう！『ワン・フォー・オール』を扱うには、それに相応しい器となる頑強な肉体が必要になるのさ」

「相応しい器となる肉体……」

「そうだ。だが、私が君を選んだのはそれだけじゃない。実は私は5年前から、ずっと『ワン・フォー・オール』の後継者を探していた。

そして、何度もヴィランだと間違われながらも、決してヒーローになる事を諦めなかった君になら。

賞賛を得るためではなく、ただ目の前で苦しみ、無力な友達を助ける為に、恐れずに〝個性〟を使って体を張った君になら。

自分と同じ境遇の人達の〝希望の象徴〟を目指す君になら。『ワン・フォー・オール』を渡してもいい。そう思ったのさ」

オールマイトの求める、『ワン・フォー・オール』を扱うに相応しい肉体と精神。その二つの条件を満たしていたからこそ、俺を次の継承者に選んだ。

オールマイトは言葉で語る以上に、その目でその心情を俺に語っていたような気がした。

「……俺がプロヒーローになったら、俺は〝平和と希望の象徴〟を目指します！」

「君ならそう言ってくれると思っていたぜ！　呉島少年！」

期待通りだと言わんばかりに、オールマイトは不敵に笑った。

●●●

翌日。俺は早速オールマイトから、ゴミ捨て場と化した海浜公園の美化活動を課題として与えられた。しかし、それはオールマイトの想像を超えてサクサク進み、俺は中学校の夏休み前日に『ワン・フォー・オール』を継承する事になった。

継承の儀式とあって、俺も少々緊張していたのだが、オールマイトはイキナリ髪の毛を一本引っこ抜いて、俺にそれを突き出した。

「喰え！」

「……はい？」

「ＤＮＡさえ摂取出来れば何でも良いんだけどね。髪の毛の他となると、爪に、フケに、鼻糞……流石に（自主規制）や（自主規制）や（自主規制）はなぁ……。後は……ディ、ディープキス……かな？」
「血じゃ駄目なんですか？」
「あ～～～。ほら、最近ちょっと貧血気味でね」
　普段から血を吐いている手前、オールマイトはあまり血を出したく無いらしい。仕方ないので、髪の毛を飲み込む事にした。それにしても長いぞ、この髪の毛。
「しかし、想像していたのと全然違いますね。個人的には『オールマイトの体から光の玉が出てきて、それが俺の体に吸収される』……みたいな事を想像していたんですが」
「ＨＡＨＡＨＡ！　君は感性が中々スパイシーだな！　まあ、〝個性〟はＤＮＡと深く結びついているものだからね。前任者のＤＮＡを摂取する事で、後継者のＤＮＡに『ワン・フォー・オール』を浸透させる必要があるって事なんだろうな！」
「……なるほど」
「私の経験則から言えば、君に譲渡した『ワン・フォー・オール』は二～三時間で君の体に馴染むだろう。それまではとりあえず――」
　オールマイトが『ワン・フォー・オール』について説明している中、これまでに体験した事が無いレベルの強烈な耳鳴りと頭痛が俺を襲った。

「うがぁあああああああああああああああああああああああああああああッッ!!」

「!?　どうしたんだ！　呉島少年！」

その後の事は良く覚えていない。意識がハッキリとした時には既に病院に居て、入院の手続きが済んでいた。それからは断続的かつ不定期に発生する激しい耳鳴りや急な発熱、更には猛烈な痙攣に苦しめられる事になった。

とても人に会える様な状態ではなかったが、心配した父さんや出久がお見舞いに来てくれた。そして勝己も俺のお見舞いに来た……らしい。

ただ、ある日の俺がトイレから病室に戻った時に、ベッドの上に大量の「マイトビタミンZ」が置かれ、それらと一緒にこんなメッセージカードが残されていたのだ。

『コイツを飲んでパワーつけろ。そんで俺がお前を殺す』

差し入れにこんな物騒な事を書くのは、勝己しかいないだろう。そしてお見舞いの品として何かが激しく間違っている。

それと、お見舞いに来たトゥルーフォームのオールマイトは物凄くオロオロしていた。何でもオールマイトの先代が『ワン・フォー・オール』を譲渡された際に、こんな現象が起こったなんて事は、一切聞いていなかったらしいのだ。

「それは単純に話していなかったと言う事ですか？　それとも想定されていないイレギュラーと言う事ですか？」

「分からない。先代の盟友だったグラントリノにも連絡を入れてみたが、そんな話は先代から聞いた事が無いとおっしゃっていたから、恐らく後者だろうとは思うが……」
「……あの、凄く震えてますけど……もしかして、この部屋の冷房効き過ぎてますか？」
「い、いや、そんな事は無い。私の脳内で封印していた恐怖の記憶が蘇っているってだけの話さ……」
　No.1ヒーローが封印する程の恐怖の記憶って一体どんな記憶なんだ？　気になる上に、色々と思う所はあるが、今はこの体の不調が治る事を願って、大人しくしている他はなさそうである。

●●●

　オールマイトから『ワン・フォー・オール』を継承し、入院してから二週間の時間が過ぎ、昨日漸く退院となった。それはつまり、中学校生活最後の夏休みを、病院のベッドで二週間分も消費したと言う事。
　とりあえず、出久と一緒に行く約束をしていた夏のヒロイックマーケットに間に合わせる為、これまで溜めていた夏休みの宿題を猛烈な勢いで消化していた俺に、オールマイトから連絡が入った。

何でも以前に話していたグラントリノなる人物に協力してもらい、『ワン・フォー・オール』の使い方や、元々持っていた〝個性〟との併用等を教えるのだとか。
「それで、一体いつ行くんですか？」
「明後日から約一週間だ。着替えと鯛焼きを忘れずにな」
「鯛焼き？」
「グラントリノの大好物だ」
翌々日。俺は待ち合わせ場所となった早朝の海浜公園の入り口で、グラントリノなる人物に対して色々と空想して、鯛焼きの紙袋を片手に時間を潰していた。
恐らくは老いを全く感じさせない筋骨隆々とした肉体を誇り、キング・オブ・トンガリと形容されそうな感じの髪形をしている老人に違いあるまい。
しかし、そんな容姿の人物は一向に現れなかった。これまで海浜公園の入り口に現れたのは、朝練に励む学生と、ウォーキングに励む老夫婦と、ヒーローコスチュームを着た小柄なおじいちゃんだけだ。そして、ヒーローコスチュームを着たおじいちゃんは、俺に普通に話しかけてきた。
「誰だ君は!?」
「あー……呉島新です」
「何て!?」

「呉島新です」
「誰だ君は!?」
「……呉島新です」
「お！　鯛焼きの匂いがするな。朝飯に丁度良い」
「朝飯に鯛焼きですか？」
「俺は甘いものが好きなんだ！」
「……欲しいんですか？」
「うむ、腹が空いたぞ……俊典！」
「俺は新です」
　俊典って誰だよ。会話が成り立っているのか成り立っていないのか、よく分からないが鯛焼きが欲しかったみたいなので、自分の分に買っておいた鯛焼きとお茶をおじいちゃんに渡した。喉を詰まらせるといけないからだ。
「冷たい！」
「昨日お店で買って、それからずっと冷蔵庫に入れてたんで……」
「しょうがねぇなぁ。まあ、凍ってるよりかマシか。ところで……誰だ君は？」
「……新です」
　このおじいちゃん、ちょっとヤバいかも知れない。しかし、このおじいちゃんからは

何となく只者では無い雰囲気を感じるのは何故だろうか？
　この場を離れるわけにもいかないので、とりあえずオールマイトが来るまでおじいちゃんの話し相手をしていたのだが、待ち合わせ場所に車で現れたオールマイトが度肝を抜いていた。
　何でもこのおじいちゃんこそが、オールマイトを鍛えたグラントリノであり、俊典とはオールマイトの事らしい。二つの意味でイメージが違った。
「それで、ここで今度は何をするんですか？」
「いや、我々はこれから山へ行くんだ！」
「山？」
　オールマイトが言うには、とあるヒーローが管理しているある山を、一時的に有料で貸して貰ったらしい。私有地なので〝個性〟の使用については問題なく、また大規模な破壊が起こっても、そのヒーローの〝個性〟で直ぐに直せるのだとか。
「一ヶ月のプランを二週間で消化しなければならないのでな！　少々荒っぽくなるぞ！」
「しかし、今の俺って二つ〝個性〟がある訳ですけど、どうすればいいんですかね？」
「それを教える為に、俺が呼ばれたんだ。とりあえずは自分が持っていた〝個性〟を使ってからだ」

隣にいたグラントリノの雰囲気が一気に変わった。何というか、歴戦の兵士の様な、有無を言わせぬ気迫を纏った感じだ。

それからオールマイトの車に揺られて数時間。山に着いた途端に俺達は岩場に移動し、グラントリノの指示通り、俺は何時も通りにバッタの〝個性〟を発動させたその時、不思議な事が起こった。

「え!?」

「む!?」

「うん？」

本来なら、先ずバッタの触覚が皮膚を突き破る激痛に苛まれるのだが、俺の腰から何かベルトの様な器官が出現し、その中心部から放たれる緑色の光に包まれた事で、俺の体は一瞬で変化していた。

「……く、呉島少年？」

「何でしょう？」

「喋った!?」

喋れた。〝個性〟を使っている間は全く話せない筈なのに。

それから、自分の体の変化を見たり触ったりして確認した。二本の触覚は六本の角となり、口の部分には蓋の様な器官が備えられている。両手足にあった棘状の「スパイン・

カッター」が消失し、その代わりに両手首と両足首にカッターの様な物が出現している。
また、肉体は全体的に筋肉質なものとなり、背中の肩甲骨辺りから布とも羽根ともつかない物が一枚ずつ生えていた。しかも引っ込める事が出来ない。
「一体何がどうなって……」
「……もしかしたら『ワン・フォー・オール』を継承した事で、お前さんが持っていた〝個性〟がそれに適応する形で進化したんじゃないか？『ワン・フォー・オール』だって〝個性〟が混ざって生まれた、突然変異の〝個性〟だしな」
「突然変異の〝個性〟？」
「何だ、『ワン・フォー・オール』の歴史について聞いていないのか？」
グラントリノから語られたのは、『ワン・フォー・オール』のオリジン。無個性だと思われていた人間から生まれた突然変異の〝個性〟。そして、その〝個性〟が受け継がれた理由と言う名の悲願だった。
「……つまり『ワン・フォー・オール』は、オール・フォー・ワンを打倒する為に受け継がれてきた〝個性〟だと言う事ですか？」
「そうだ。人類が人間と超人に二極化され、法が意味を失い、文明が歩みを止めた暗黒の時代。絶対強者とされた一人の巨悪から生まれた、正義という名の小さな聖火の火種として『ワン・フォー・オール』は生まれた。たった一つの、目的の為に！」

「……ちょっと待って下さい。オール・フォー・ワンが倒されたのであれば、今後『ワン・フォー・オール』を継承する者って必要あるのですか？」
「おいおい。確かにオール・フォー・ワンは5年前に倒されたが、これから先の未来でオール・フォー・ワン以上の悪党や、オール・フォー・ワン以上の〝個性〟を持った人間が現れないとは限らないじゃねぇか」
「それにあの時確かに倒しはしたが、死んだかどうかは分からない。何せ相手は何でもありと言って良い〝個性〟を持った相手だ。流石にあの怪我で生きているとは思えないが……もしかしたらと言う事もある」
「なるほど……」
　想定外の事態は必ず起こる。世界を震撼させる巨悪が倒れたとしても、それに連なるような異端が現れた時の対抗手段として、『ワン・フォー・オール』を準備しておきたいと……言う事か。
「それよりも今はお前だ。何か自慢の必殺技とかあるか？　あるんなら……とりあえず、あの岩を俺が転がすから、ソレに向かって使ってみな」
　グラントリノが指差したのは、都合よく崖の上に置かれている２ｍはある大岩。アレを崖から転がすと言うあたり、グラントリノはまだまだ現役バリバリらしい。
　しかし、俺の自慢の必殺技か。それなら間違いなく、バッタの脚力を利用した強力な

蹴りだ。決して「相手の頭を脊髄ごと引っこ抜く」と言うような、グロい見た目にぴったりなエグい必殺技は持っていない。
「ハァアアア……ッ！」
とりあえず気合を入れると、口の蓋をしていた部分が上へスライドし、俺の足元の地面に六本の角が印象的な不思議なマークが現れた。
「よぉーーし！　行くぞッ！」
「スウウウウ……」
グラントリノの蹴りによって大岩が此方に向かって転がってきた。しかし、俺は焦らずに空手の型をイメージしたポーズを取りながら、ゆっくりと深く腰を落した。足元のマークが両脚に吸収・収束していくのが感覚として実感出来、それが完全になったと感じたその瞬間、俺は大岩に向けて高く跳躍した。
「トォオウッ!!」
「!!　何か知らんがヤバい!!」
「シャアアア

者である『ワイルド・ワイルド・プッシー・キャッツ』の一人のピクシーボブによって、瞬く間に直された。

●●●

その後、オールマイトとグラントリノの特訓は熾烈と苛烈を極めた。何せ体は出来上がっている上に、並大抵の攻撃ではまず死なない。お蔭で手合わせは全く容赦が無い。

三日ほどそれが続いた後に、グラントリノ曰く「フェーズ2」へと移行し、この山の管理者である『ワイルド・ワイルド・プッシー・キャッツ』の皆さんが協力してくれる事になった。

オールマイトやグラントリノに比べれば楽だろうと思っていたのだが、俺はそこで全く対応する事ができない、所謂『天敵』と言っていい相手と遭遇した。それは……。

『きゃあ、カッコイイ。すっごく鍛えこんでて、結構好みのタイプ♪』

『ぐわぁああああああああああああああああああああッッ!!（歓喜）』

「隙ありっ！」

「ぐわぁああああああああああああああああああああッッ!!（激痛）」

そう。テレパスの〝個性〟を持つマンダレイさんだ。彼女の〝個性〟は正に強力無

比。避ける事も防ぐ事も出来ず、全ての攻撃が容赦なく俺の心に浸透し、隙だらけの俺の体に引っかき傷を次々と刻んでいく。まあ、即効で治るんだけど。

「おい小僧！　さっきから何をやってる！　面白い様にポンポンやられやがって！　やる気があるのか!?」

「……しょ」

「しょ？」

「しょうがないじゃないかぁーーーーーッ！　俺だってカッコイイとか、好みのタイプとか言われたら、嬉しいんだよぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」

「はぁ？」

ガミガミと説教をしてくるグラントリノに対し、俺は号泣しながら自分の思いの丈をコレでもかと叫んだ。こんななりだが、俺だって中学三年生のピュアボーイなのだ。何だかんだ言っても「〝個性〟を使った状態でカッコイイと言われる」と言う、完全に諦めていた事が現実のものとなり、嬉しくない訳がない。

「辛いことや苦しい事は人生のスパイスだとか言うけどさぁ！　それなら俺の人生ずっとスパイスまみれだよ！　オードブルも、スープも、メインディッシュも、デザートも、ドリンクも、全部カレーしか出てこねえっつーの！」

「にゃあ……」

その言葉にラグドールは困惑した。今晩の夕食にカレーを作るつもりだったからだ。ここはカレーから肉じゃがに変更したい所だが、冷蔵庫に糸こんにゃくがあったかどうか思い出せない。

「ま、まあ、落ち着きなよ。アタシだって、この年になるまで全然結婚できてない独身だしさ……」

「……嘘だッッ!!!」

「え?!」

「本当の事を言え！　自慢じゃないが俺には甘い思い出話なんて、一つもねぇ！　それに比べてアンタの場合、そのチャンスは幾らでもあった筈だ！　ところがあんたは、『もっと良い条件の相手が出てくるんじゃないか』とえり好みしていた所為で、何時の間にか『貰ってくれるなら誰でもＯＫ』な状態になったと違うか!?」

「ぐはぁっ!!」

恋愛面でコンプレックスがあると言う点では二人は共通していたが、様々な理由から非モテ街道を驀進する新と、単純に婚期を逃して気にしだしたピクシーボブでは、その根幹も本質も全く違う事を、新は完全に見抜いていた。いや、同族かどうかを嗅ぎ分けたと言うべきか。

そして、余りにも心当たりが有り過ぎる上に、余りにも鋭過ぎる指摘が胸に深々と突

き刺さり、ピクシーボブは血を吐いて倒れた。
「……まあ、確かにオールマイトとは違った意味で画風が違うって言うか、避けられるのも無理は無いって言うか……」
「ま、マンダレイ！」
「え？　あ……」
　巨漢の虎さんが注意していたが、もう遅い。結構大きな声で言っていたマンダレイさんの独り言は、しっかりと俺の耳に届いていた。
「うあああああああああああああああああああッッ!!　女なんて皆デーモンじゃぁああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッ!!」
「え!?　あ、あちきも!?」
「く、呉島少年！　アレだ！　ドンマイだぁああああああああああああああああッッ!!」
　何もしていないラグドールが困惑している事など知らんとばかりに、怪人は絶叫と共に涙を流しながら木々をなぎ倒し森の奥へと消えていった。しかし、木がなぎ倒されているお蔭で怪人の通り道は一目瞭然。「ヘンゼルとグレーテル」ならぬ「マッスルでグレート」と言った感じの、実に豪快な目印である。
「……アイツの今後の課題は精神面だな」
　カオスが極まった現場を他所に、グラントリノは森の奥へ消えた怪人を探しに行っ

た。そこでグラントリノが見たものは……。
「き、聞いてくれ。俺は味か――」
「うわぁあああああああああああああああああああああああッッ!!
く、来るなぁあああああああああああああああああああああああああああああッッ!!」
「……」
お菓子の家ならぬ、秘密基地の洞窟を前にして、子供に絶叫と共に逃げられた事で両手と両膝をつき、深く項垂れている怪人の姿だった。

●●●

中学校生活最後の夏休みは色々な意味で最悪だったが、冬休みはそれなりに楽しめた。
今年のクリスマスは「クリスマイト・プレゼント」の手伝いで、オールマイトと二人でしんしんと雪が降る冬の山でひたすら間伐をした。手伝いが終わった後で食べた、天界一筋肉質な天使が作ったシチューはやたら旨かった。
そして、出久がヒロイックマーケットで三時間並んでやっと手に入れたと言うオールマイトのグッズを、俺はオールマイト本人からクリスマスプレゼントとして一通り貰っ

た事は言わないでおいた。

そして時間は瞬く間に通り過ぎ、遂に雄英高校の入学試験の日が、入学の為の実技試験の開始時刻が迫っていた。今頃別の試験会場に居る出久は、緊張しながらも様々な装備を身につけているに違いない。ちなみに装備品はメイド・イン・父さん。

『スタート！』

プレゼント・マイクによる試験開始の掛け声と同時に、俺は戦場に向かって猛然と掛けだした。

戸惑う他の受験生を他所に、俺は父さんから受け継いだ〝個性〟と、オールマイトから引き継いだ〝個性〟の二つによって生まれた、新しい姿と新しい力を発動させる為のキーワードを、独特のポーズを決めながら宣言するように言い放つ。

「変身！」

二つの〝個性〟の完全なる調和は、演習場に所狭しと配置されている仮想ヴィランを捉えた。

――完――

Q：もしも『ワン・フォー・オール』を受け継いだのがシンさんだったら？

A：おめでとう！　シンさんはアナザーシンさんに進化した！

ＩＦ・怪人バッタ男　序章―ＤＡＲＫ　ＳＩＤＥ―
２／３話　爆誕！　怪人王子！

もしもシンさんが、ダークサイドに身を堕としていたら？

●●●

Ｍｔ．レディのサイドキックによって自宅の近くまで送って貰った後、俺は一人で夜の住宅地を歩いていた。一応、家に連絡を入れてあるから大丈夫だと思うが、やはり早く帰って安心させたいと思うのが、親を思う子心と言う物だろう。まあ、父さんはあまり家に居る事は無いのだけど。

「だ、誰か、助けてくれぇえ～～～～～～ッ!!」

!?　誰かが助けを求めている！　声の大きさからすると距離はかなり遠いが、俺の〝個性〟なら現場まで一っ飛びだ。俺は名も知らぬ誰かを助けるべく、本日三度目の〝個性〟を発動する。

「ヴヴゥゥゥ…ＧＲＹＡＡＡ

ＡＡＡ

「うわぁああああああ

不味い。コイツ、攻撃がかなり早い。一応まだ対応圏内だが、只でさえ消耗している状態で、このレベルを相手に連戦はかなり不味い。ここは逃げた方が吉だな。

そもそも助けを求めた相手が助かっているのだから、当初の目的は達成されている。それならば俺が此処で逃げても問題は無いし、コイツから逃げるだけなら何とかなる。そして誰か適当なプロヒーローに助けを求めれば良いのだ。俺を見て助けてくれるかは別として。

「ぎゃぁぁぁ

「ＨＵＵＵＵ……ＳＹＡＡＡ

せた翼のヴィランが何時の間にか復活して俺に襲いかかり、俺を地面に叩きつけたのだ。

先程とは逆の展開となり、地面にめり込んだ俺が起き上がろうとすると、今度は全身が真っ黒で、頭部が脳味噌と下顎だけの大男が近づいてきた。

三人目……。もしかして、コイツがさっきのチンピラを……？

「WOOO

「ＡＡＡ……」
「ふむ……負けたとは言え、脳無を相手にここまで戦えるとはの。……ククク、実に面白い素材じゃ。こやつこそ、あのオールマイトを抹殺する為の、『更なる男』に相応しい……!!」

●●●

……？　此処は……何処だ……？　確か俺は……帰り道にヴィランと戦って……。アレから、どうなった？　ここは病院か？　今は何時だ？
……!!　な、何だ、この真っ白な、鎧を纏った様な腕は……!!　誰かが俺に着せたのか？　……いや、違う。コレは服や鎧の類いじゃ無い。
皮膚だ。これは、俺の皮膚が爪の様に、硬く硬質化しているのだ……!!
「へぇ。自我を失っていないとは驚いた。流石にドクターが面白いと言うだけはあるね」
!?　だ、誰だ!?　妙なヘルメットをしているが、病院の先生か!?　俺は、俺の体は一体どうなったんだ!?
「ふむ、まず最初の質問だが、確かに私は先生と呼ばれているが、ドクターではない。そ

して、次の質問に答える前に、まず君の隣を見てみるといい」

隣……？　!!　コイツは、さっき戦った、黒いヴィラン!?

……いや、よく見ると違うな。確かにアイツと同じで脳味噌が丸出しだが、アイツには顔らしい顔が無かった。でもコイツにはちゃんと顔がある……。

「フフフ……それは『脳無』と言ってね。一人の人間をベースに複数の〝個性〟を与えた、所謂『改造人間』という奴なんだ。そして、君は今や彼等の同類と言っても過言では無い」

同類？　どう言う事だ？　何を、何をしたんだ……!!　俺の体……、俺の体に……!!

「君がここに来てから、今日でちょうど一週間。我々は君の体に『脳無』と同様の処置を施したんだ。ドクターが薬物等を使って肉体を改造し、複数人のＤＮＡを注入する事で、複数の〝個性〟に見合う器に造り変える。そこで僕が複数の〝個性〟を投与する事で完成するのが『脳無』だ。普通ならそこの『脳無』と同じ様な姿形になって、物言わぬ人形の様な状態になる筈なのだが……君の場合、君が元々持っている〝個性〟の問題からか、大分特殊な変異を遂げたみたいだね」

ふ、ふざけるな……!　元に戻せ！　俺を、元の体に戻してくれ！

「ハハハ、それは無理な相談だ。『脳無』を元の人間に戻す術は存在しない。所で話は変わるが、君について少し調べさせて貰ったら、とても面白い事が分かった。ほら、君が

戦った『脳無』の一人に翼が生えている個体がいただろう？　あの『脳無』は実は、君もよく知っている人間なんだ。ほら、君が小学生だった頃、遊び相手に翼を生やした太った少年がいただろう？　アレだよ」

なん……だと……!?　元の姿には戻れない……？　そして、あの脳無の正体が、あの、ツバサだと……!?　それじゃあ、俺は……、ツバサは、もう……ッ!!

「涙か……しょうの無い子だね。でも大丈夫だよ。君もすぐに彼と同じになれる。さて、それでは君を使って少し冒険するとしよう。君が自我を保ったままで、どれだけの数の〝個性〟を引き受ける事が出来るのか。その限界を試させて貰う。何、心配する事は無い。君は今日から生まれ変わるんだ。この僕の手で……」

そう言うとヘルメット男の指先が黒い枝のように伸びて、俺の体に突き刺さる。そして、そこから俺に何か大きな力が流れ込み、体の中で滅茶苦茶に暴れている様な異物感と激痛が襲った。

それと同時に俺の体は黄金色に輝きだし、頭の中では何人もの人の顔が、走馬燈の様に浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。そして顔が消えていく度に、ソレが誰なのかが思い出せなくなっていく。ソレが誰なのかが分からなくなっていく。

まるで、完成された水彩画が、真っ白なペンキで塗り潰されていく様な感覚。心は不安と孤独に支配され、次第に自分が何者なのかも分からなくなっていく。

――『〝個性〟に苦しんでいる人達の希望の象徴』。それが私の目指すヒーロー像よ――

誰の言葉だったか、もう思い出す事は出来ない。だが、それが自分にとって、とても大切な言葉だと言う事だけは分かる。絶対に忘れてはいけない、大事な言葉である気がする。

これだけは例え、神でさえも、奪わせはしない……ッ!!

「WUUUUUUUU!! RUWOOO

「……」

――カショッ……。カショッ……。――

室内に充満した煙が視界を埋め尽くす中、その光景を目の当たりにした男――オール・フォー・ワンの耳に届いた不気味な足音は、恐ろしい怪物の産声に聞こえた。

○○○

人気の無い路地裏を一人の少女が走り、それを一人の男が追いかける。少女は手足に包帯が巻かれており、靴も靴下も履いていない。何が落ちているか分からない路地裏を裸足で走るなど危険極まりないが、少女にそんな事を考える余裕は無かった。

「ハッ……ハッ……」

「……」

少女は一心不乱に男から逃げていた。我武者羅に助けを求めていた。誰でも良いから自分を助けて欲しかった。自分を逃すまいと造られた強固な鳥籠に出来た僅かな隙間。自由へ続く一瞬のチャンスに少女は全てを賭けた。

そして、路地裏を抜けて大通りに出た瞬間、少女は一人の少年にぶつかり、尻餅をついた。

「……」

「……あ」

どこか無機質な瞳で此方を見る少年を見て、少女は「少年を怒らせてしまったのでは無いか？」と思い萎縮する。そんな少女の様子を見た少年は、ゆっくりと近づいて少女を立たせると、これまたゆっくりとした動作で頭に触れようとした。

その一瞬、少女には目の前の少年が、緑色の目に銀色の髑髏の様な顔をした、恐ろしい怪物に見えた。

「ひっ!!」

殺される。少女は本能的にそう直感し、恐怖から強く目をつぶった。そして、少女の頭に少年の手が触れた時、その時が来たのだと大きく体を震わせる。

……しかし、少女にその時は一向に訪れなかった。それどころか、少年の手から感じる暖かい感触は、少女の不安を徐々に取り除いていった。

「あ……」

「……」

「ダメじゃないか。知らないお兄さんに迷惑かけちゃ」

「!!」

故に、一瞬忘れてしまった。自分がこの男に追われる身であった事を。

「……家の娘が済みません。遊び盛りで怪我が多いんですよ、困った物です」
「……」
若い。だが油断できない。
それが少女を追いかけていた男――治崎の抱いた少年に対する印象だった。一見すると中学生くらいの、何処にでも居そうな少年なのだが、その目は明らかにカタギの人間のモノではない。
「さあ、エリ帰るぞ」
「……」
無表情故に何を考えているのか分からない。だが、治崎の言葉を信じているのか、はたまた事を荒立てるつもりがないのか。どちらかは分からないが、少年は少女――エリを素直に治崎へと渡そうとする。
「嫌だ……いかな……いで……」
「……」
「ああ、実は最近ずっとこうでして、何を言っても反抗ばかりで……」
「……」
少年にしがみつき、治崎の元へ戻る事を拒むエリ。それについて治崎が反抗期だと説明するが、話を聞いているのか聞いていないのか、少年の表情は微動だにしない。

「お願い……」
「……許せ。また今度だ」
初めて言葉を発した少年は、涙を浮かべ震えながら懇願するエリの額を指で優しく小突き、エリを治崎へと渡した。
「あ……」
「すみません。ご迷惑をおかけしました。では……」
「……」
絶望に満ちた表情をしたエリを抱いた治崎は、少年に一礼すると歩いてきた路地裏の奥に戻っていく。
「……」
暗闇の中に消えていく二人を見つめる少年――呉島新は、しばらく暗闇の中を見ていたが、再び大通りを歩き始めた。
二人が消えた路地裏を、一匹の大きなバッタが飛翔していた――。

○○○

「良かったのかね、先生。私と先生で造り上げた『更なる男』……シャドームーンを一人

で死穢八斎會に行かせてしまって」
「ああ、彼がどうしてもやりたいと言うからね。それに遅かれ早かれ、死穢八斎會とは覇権を競い合う事になっていただろうしね」
　オール・フォー・ワンがアジトにしている建物の一室。そこでドクターは、シャドームーンが単身で死穢八斎會に向かった事を咎めるが、それを許可したオール・フォー・ワンは、盲目であるにも関わらず液晶ディスプレイを前にし、不敵な笑みを浮かべている。
　まるで、今回の事の顛末が分かりきっているかの様に。
「それにコレは案外悪くない方法だ。手っ取り早く、軍団を手に入れる方法は大きく分けて二つある。一つは弔の様に、この社会で爪弾きにされた日陰者達の欲望を言葉巧みに刺激し、一つの目的の下に扇動する事。もう一つは、何処かの軍団を壊滅させ、その敗残兵を吸収する事だ」
「シャドームーンに死穢八斎會を壊滅させ、その構成員を手に入れようと言うのかね？」
「そうだ。既に出来上がった軍団を無傷で手に入れる方法なぞ存在しない。軍団を手に入れるには、一度軍団を潰すしかない。そして、彼等の統括はシャドームーンにやって貰う」
「『暗黒結社ゴルゴム』じゃったか。『敵連合【ヴィランれんごう】』に比べれば随分と大仰な団体名よのう」

現在、オール・フォー・ワンが手塩にかけて育てている死柄木弔が『敵連合』なる団体を立ち上げている様に、シャドームーンもまた『暗黒結社ゴルゴム』と言う軍団を組織しようとしていた。

オール・フォー・ワンとしては、自分の下に二つの団体を作ることで、意図的にライバル関係を生み出し、お互いに競争心を燃やして切磋琢磨して貰おうと言う腹積もりであり、ここまでは思い描いたシナリオが順調に機能していると言えた。

「しかし、連中は未完成とは言え、〝個性因子〟を傷つけ、〝個性〟を使用不能にする薬品を持っているのだろう？　下手をすればシャドームーンは此処で使い物にならなくなるぞ？」

「心配ない。今回の件は彼の力を知る好い実験になるだろうし、いざという時は脳無を出動させて回収する。もっとも、彼等はいずれ思い知る事になるだろう。『そんなモノに頼った時点で、〝次の闇の帝王〟など叶わぬ夢だったのだ』とね……」

「……」

そう語るオール・フォー・ワンを見て、ドクターは「弔とシャドームーン。この二人を競わせ、勝ち残った方を〝次の僕〟にする」と語った時の事を思い出していた。

元々、次の闇の帝王として、オール・フォー・ワンに選ばれていたのは死柄木弔であった。しかし、オール・フォー・ワンは、もしも死柄木弔が満足いく後継者として完成を

見なければ、シャドームーンを自分の後継者とする事を考えており、二人の候補者を両天秤にかけていた。

死柄木弔とシャドームーン。〝次の闇の帝王の座〟を賭けて戦う事になる二人には、共存や共生と言う未来は決して存在しない。敗者は勝者の贄となり、この世界の闇に人知れず葬り去られる事になるだろう。

「そして……『改造人間は進化できるのか?』。我々が待ち望む答えは、きっと必ず其処にある」

３／３話　私と戦い、『ワン・フォー・オール』を渡すのだ！

古来、バッタの大量発生による蝗害は天災の一つに数えられ、『ヨハネの黙示録』に登場する「奈落の王アバドン」は、蝗害が神格化されたものだと言われてきた。

日本でも明治初期に北海道で蝗害が発生し、１８８０年には陸軍が大砲を打ち込むなどして駆除を務めたが、バッタ達は入植者の家屋の障子紙まで食い尽くし、各地で壊滅的な被害をもたらしている。

もっとも、日本を含む大抵の国では殺虫剤の普及が進み、現代ではまず蝗害が発生する事は無い。

しかし、エリが脱走した日の夜。死穢八斎會の本部は、夜空を覆い尽くさんばかりの、大量の巨大なバッタの群れに襲われた。

「うわあああああああああああああああああああああッ!!」

「何じゃ、コレはぁあああああああああああああああああああッ!!」

「フンッ!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああッ!!」

下っ端の組員達が混乱の極みに陥る最中、機械の様な力強さと正確さで、冷徹に組員を斬り伏せていく、銀色の甲冑を纏った剣士――シャドームーンは単身で殴り込みをかけていた。

その手に持つのは、自身の〝個性〟で創り出した剣『サタンサーベル』。その刀身は血の様に赤く、刃は満月の光に照らされて妖しい輝きを放っている。

「……ムンッ！」

見張りを一通り黙らせたシャドームーンは、鍵の掛かっていた扉をサタンサーベルで両断すると、建物の中へゆっくりと歩を進めた。

特徴的な足音がシャドームーンの侵入を組員に知らせる警報になっていたが、そんな事はお構いなしに、シャドームーンは次々と迫り来る組員をなぎ倒し、斬り捨て、真っ直ぐにある場所へと向かって進んでいく。

「……此処か」

シャドームーンの緑色の両目は『マイティアイ』と呼ばれ、望遠・暗視・広視界に加え、透視能力を備えている。本部の中をこの『マイティアイ』で観察しながら戦っていたシャドームーンは、地下に通じる隠し通路の存在を容易く看破していた。

「フッ！　ムゥウンッ！！」

「「ぎゃぁぁぁ

当然、隠し通路の向こう側に待機していた組員の存在も、シャドームーンには筒抜けである。壁にサタンサーベルを突き刺し、壁越しに三人の組員を戦闘不能に追い込むと、壁を斬って地下へ悠々と降りていく。

しかし、順調だったシャドームーンの歩みは、通路の天井・壁・床がまるで生き物の様にウネウネとうねり始めた事で止まる。

これは、死穢八斎會本部長、「ミミック」こと入中常衣の〝個性〟『擬態』によるものであり、強化薬によって〝個性〟をブーストする事で、膨大な質量を操る事を可能にした結果である。これにより地下は「生きた迷宮」と化し、侵入者は容易に目的地に辿り着けず、鉄砲玉である『八斎衆』との戦闘を余儀なくされる。

――本来ならば。

「シャドービームッ!!」

「ぐわぁああああああああああああああああああああああああああああッ!?」

シャドームーンが掌から稲妻のような緑色の光線を放射すると、照射された通路が赤熱化して大爆発を起こし、通路の内部に潜り込んでいたミミックは、シャドームーンの眼前へ強制的に引きずり出される。引きずり出されたミミックは辛うじて生きていたが、戦闘を続行する事は不可能であった。

「……」

湾曲したまま固定された通路を見やり、再び歩き出すシャドームーン。ここまで足止めは全く意味をなさず、シャドームーンにとっては消化試合と言っても過言では無かった。

「やれやれ、『攻め込んできたのが一人』だと分かった時は、何処の馬鹿の仕業だと思いやしたが……」

「ああ、こんな奴がこんな時代に居るとはな……」

しかし、この男だけは違う。死穢八斎會若頭・治崎。「オーバーホール」と呼ばれるこの男だけは、本気で相対しなければならないと、シャドームーンは確信していた。

「シャドービームッ!!」

「盾」

「はッ!」

治崎の傍に侍る三人の男が気になるが、シャドームーンは治崎を倒せば統制は崩れると考え、先手必勝とばかりに治崎へ破壊光線を発射するが、発射された破壊光線は半円状のバリアによって全て防がれた。

「矛」

「オウッ!」

そして、ビームを放出し終えた直後を狙い、一人の大男がシャドームーン目がけて突

進し、高速の連打を繰り出してくる。
「ムゥウウン……！」
「！　ほう！　コレを受けて倒れない奴は久し振りだ」
両腕を上げて頭をガードし、強化皮膚『シルバーガード』で連打を耐えきったシャドームーン。それを見て治崎に矛と呼ばれた男――乱波は相手が自分の全力をぶつけても良い実力者だと判断する。
「俺は思うんだ。ケンカに銃や刃物は無粋だって。持っていたら誰でも勝てる。そういうのはケンカじゃない。その身に宿した力だけで殺し合うのが良いんだ……分かるかな？」
「……」
そう語る乱波の視線は、シャドームーンが乱波の攻撃をガードした際に捨てた、サタンサーベルに向けられている。そこで乱波の意図を察したシャドームーンは、サタンサーベルを拾うこと無く両手を構えた。
「……来い」
「！　分かってくれたか！　良い虫だ！」
喜びを露わにする乱波が再び拳を振るい出すと、シャドームーンもそれに応える形で拳を繰り出した。二人の拳と拳はぶつかり合う度に血飛沫を舞い上がらせ、鮮血が赤い

軌跡となって、二人の攻防の凄まじさを第三者の目にも明らかにさせた。
防御力で言えば、乱波よりも『シルバーガード』を全身に纏ったシャドームーンの方が上で、攻撃力に関してもシャドームーンの方が若干上回っている。
そうなれば乱波の方が受けるダメージが大きくなるのは必然であるが、シャドームーンの方も全くの無傷と言う訳ではなく、シャドームーンの拳には少しずつだが亀裂が生じ、それは徐々に大きくなっていた。
「シャァァァ

滅させ、シャドームーンは『怪人バッタ男』と形容すべき姿になっていた。
「何!?」
「!? 何だ!?」
「なるほど。異形系がベースの複合系か。多少手こずったが、もうお前は終わりだ。お前はこれから、しばらく〝個性〟を使う事は出来ない。異形の姿をした、普通の人間だ」
「何……だと……!?」
「乱波、何をしている。早くソイツを始末しろ」
「……チッ!! 悪いがそう言う事だ!!」
「!! ガァァァ

ＯＯＯＯＯＯＯ!!』

――暗く深い闇の中で、かつて脳無に与えられた敗北だった。

「!!　ウォオオオ

シャドームーンの腹部の宝玉が月の光に反応し、周囲に眩い緑色の光を放った。視界を埋め尽くし、影さえも消し去る激しい輝きの中、シャドームーンの体は瞬く間に修復され、そこから〝更なる進化〟を遂げていく。

そして、光が収まった時、シャドームーンは先程とは異なる形状の白い鎧に包まれた、新たな姿を獲得していた。

「!?　ば、馬鹿な!!　未完成品とは言え、幾ら何でも復活が早過ぎる!!」

「どっちでも良いッ!　これは正に命を賭す事でしか生まれぬ力ッ!!　それをもっと、この俺に披露してくれッッ!!!」

復活……否、新生したシャドームーンに再び繰り出される連打の嵐。残像によって無数に分裂した様に見える二つの拳を、シャドームーンはピッチャーフライでも取るかの如く、難無く両手で掴み取ってみせた。

「!?　動かねぇ……ッ!!　押すことも、引くことも出来ねぇッ!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

拳を掴む事で乱波の攻撃を封じ、そのまま押し相撲の如く前進するシャドームーン。床を削りながら乱波の体を後退させ、勢いを付けたシャドームーンは跳躍し、乱波に両足蹴りを繰り出した。

「シャドーキィイイイイイイイイイイイイイイイイック!!」

緑色に発光した両足が乱波の体に命中した瞬間、シャドームーンは掴んでいた拳を離し、乱波の体を大きく吹き飛ばした。

「ガ……ッ!!」

「!!　最大最硬防――」

「サタンサーベル!!」

敗北した乱波を見やり、盾と呼ばれた男――天蓋は自身に出来る最大最硬のバリアを展開し、治崎を守ろうとした。

それを見たシャドームーンは、地面に落ちたサタンサーベルを手元に呼び戻すと、天蓋をバリアごと一刀の下に斬り捨てる。

「ぐぉお……ッ」

「チッ、仕方が――!?」

「!?　オーバーホール！　何をして――」

「フンッ!!」

「ギャアアアアアアアアッ!!」

「ぐっ……！」

自身の〝個性〟を用いて乱波と天蓋を復活させようと考えた治崎の動きが止まり、その様子をクロノスタシスが怪訝に思った瞬間、シャドームーンはサタンサーベルを投げ

つけ、クロノスタシスを壁に縫い付けた。
治崎の〝個性〟は『オーバーホール』。それは触れたモノを生物・無生物問わず〝分解〟して〝治す〟事が出来、それは複数の異なる物体や生体を融合させたり、〝分解〟の段階で止める事で相手を即死させたりする事が出来ると言う、恐るべき〝個性〟である。
その事をオール・フォー・ワンから事前に聞かされていたシャドームーンは、「もしかすれば他人や自分自身を一度〝分解〟して〝治す〟事で、与えた負傷も即座に治す事が出来るかも知れない」と考え、治崎を始末しない限り、自分に勝利は無いと確信していた。
故に、手駒が倒れ、治崎が動いた瞬間に狙いを定め、自分が持っていた生来の能力である「超強力念力」を使い、治崎の動きを完全に封じたのだ。
そして、そんなシャドームーンの懸念に応えるかの様に、生まれ変わったシャドームーンは新しい姿と共に、治崎を問答無用で殺害する方法を獲得していた。
「シャドーセイバー!!」
シャドームーンが叫んだ瞬間、ベルトの左側の穴からグリップの様な物が出現し、それを左手で引き抜くと、スムーズな動きで振り回しながら右手に持ち換える。
進化したシャドームーンが生成した新たな武器。それは深紅に輝く光子の剣であっ

た。

「シャドークラッシュッ!!」

「うぐわぁああああああああああああああああああああああああああああッ!?!?!?」

シャドームーンは身動きの取れない治崎の脇腹をシャドーセイバーで貫き、体内に高エネルギーを注ぎ込むことで、治崎の肉体を内部から破壊し尽くしていく。

注ぎ込まれた高エネルギーは、その高出力故に治崎の肉体を燃やすのを通り越して一気に気化させ、骨も残らない所か灰さえも残さず、断末魔の悲鳴と共に治崎をこの世から完全に消滅させた。

「終わった……」

こうして、実質的にボスと言える立場の若頭・治崎を倒したシャドームーンは、再び薄暗い通路の中を歩き始める。そして、目的地に到着すると、近くで待機していた見張りを蹴散らし、頑丈な扉を無理矢理こじ開けて中に入った。

「だ、誰……？」

そこには、シャドームーンが昼間に出会った少女――エリがベッドの上から此方を驚いた様子で見ていた。

「……もう大丈夫」

「え……？」
「私が来た」
オールマイトを倒す為に造られた『更なる男』。
シャドームーンは皮肉にも、オールマイトと同じ言葉をエリにかけた。

○○○

それは、雄英高校ヒーロー科に進学した緑谷出久が、ヒーロー基礎学で「屋内対人戦闘訓練」を行い、放課後に幼なじみの爆豪勝己に、自分の秘密の打ち明けた日の夕方。
彼が家路に就いた時、一度聞いたら忘れられない特徴的な足音を響かせて、ソレは彼の目の前に突然現われた。
「……緑谷出久。いや、九代目『ワン・フォー・オール』継承者よ」
「あ……あっちゃん？　あっちゃんなの？」
「私は『暗黒結社ゴルゴム』の首領にして、次期『創世王』シャドームーンだ」
「ゴ、ゴルゴム？　シャドームーン？」
「フッフッフッフッフッ……」
不敵な笑い声を上げて「シャドームーン」と名乗る銀色の怪人。

　しかし、出久には直感で理解できていた。目の前にいるのは、1年前に突然行方不明になった、自分にとって一番親しかった友人にして、ある意味で最も憧れていた幼馴染みなのだと言う事を。
「今まで何処に居たの、あっちゃん!?　おじさんも、かっちゃんも、オールマイトも心配して……今まで何をやっていたの!?」
「フッフッフッ……緑谷出久、私は理解したのだ。この世界に蔓延る理不尽と、私が成すべき使命を……」
「な、何を言ってるんだよ……」
「かつて、人という規格が崩壊し、文明が歩みを止めた時代があった。人々は超常の力を持つ者達を〝化物〟と呼んで忌み嫌い、人ならざる者として存在そのものを拒絶した。それから時は流れ、世界総人口の約8割が〝化物〟となった現在、〝化物〟達は〝人間〟を自称し、自分達の中から再び〝化物〟を選別し、彼等を拒絶し始めた……」
「……！」
「私はソレが許せないのだ、緑谷出久。誰かがやらねばならん。やらねば彼等は、永遠に歩き続けなければならない。だからこそ私は〝化物〟の烙印を押された彼等を率い、世界に忌み嫌われし者達の楽園を……『ゴルゴム帝国』を築くのだ」
「『ゴルゴム帝国』……」

「そうだ。〝化物〟と称された彼等はいずれ、〝人間〟に取って代わり、地上に新たな文明を作る事となる。今の世界を破壊し、零から世界を創り直す。故に私は『創世王』と名乗るのだ」

変わり果てた幼馴染みが語る壮大な野望。その余りにも巨大なスケールに圧倒されつつも、出久は「これはオールマイトの力を受け継ぐことになった、自分に対する宣戦布告なのだ」と理解した。

「緑谷出久。私は必ずや、九代目『ワン・フォー・オール』である貴様等を倒し、この地上に『ゴルゴム帝国』を築いて見せる。覚悟しておけよ……」

「！　待って！　あっちゃん!!」

次の瞬間、シャドームーンの全身を緑色の稲妻が走ったと思うと、シャドームーンはまるで蜃気楼のように消えた。幼馴染みの悲痛な叫びに応える事も無く……。

○○○

シャドームーンの宣戦布告から数日後。雄英高校は『敵連合【ヴィラン連合】』を名乗る、多数のヴィランの襲撃を受けていた。ＵＳＪで救助訓練を受ける予定であった１年Ａ組の面々は、黒霧の〝個性〟によってＵＳＪの多種多様な救助エリアへ飛ばされたこ

とで散り散りとなり、そこで待ちかまえていた複数のヴィランとの戦闘に身を投じていた。

　その中で、水難ゾーンに飛ばされた出久は、中央広場で『敵連合』の首魁と思われる手だらけ男の傍に侍るシャドームーンに目が釘付けになっていた。

「あっちゃん！　目を覚まして！　君はそいつ等に騙されているんだ!!」

「……」

「何だ？　お前の知り合いか？」

「……」

　出久の説得にも、死柄木の疑問にも、シャドームーンは一切答える事無く、ひたすらに沈黙を保っている。

　実を言うと、此処に居るシャドームーンは、シャドームーンがイナゴ怪人をベースにして創り出した分身体であり、呉島新本人では無い。本体である呉島新からサタンサーベルを与えられてはいるが、分身体そのものの戦闘力は本体の１０分の１程度しかない。

　これではとてもオールマイトを倒す事など夢のまた夢なのだが、今回それは死柄木が率いる『敵連合』の目的であり、シャドームーンが率いる『暗黒結社ゴルゴム』の目的では無い。故に、このシャドームーン分身体は、それとは全く別の目的からこの場に居

合わせている。
「まぁいいや。コイツの知り合いだろうが、何だろうが、平和の象徴の矜恃を少しでもへし折る為に……死んでくれないか？」
素早い身のこなしで出久達の眼前に移動した死柄木は、迷うこと無く出久と蛙吹の頭部へ両手を伸ばし、〝個性〟『崩壊』による即死を狙う。
そして、後ほんの数ミリで死柄木の両手の五指が出久と蛙吹の頭部に触れると言うタイミングで、ＵＳＪの外壁が破壊され、何者かがＵＳＪに侵入した。
「スパークリングアタァァァ

ＡＡＡ

ソレを見た瞬間、沈黙を保っていたシャドームーン分身体が、サタンサーベルの切っ先を向けて、男に近づきながらこう言った。。
「来たか……裏切り者の『虫けら【ワーム】』。イナゴ怪人ＢＬＡＣＫよ!」
「……違う。俺は、イナゴ怪人ＢＬＡＣＫでは無い」
イナゴ怪人ＢＬＡＣＫと呼ばれた男はバイクから降りると、シャドームーン分身体を真っ直ぐに見やり、独特のポーズを取りながら高らかに、自分のヒーロー名を堂々と名乗った。
「俺は、人類の自由と平和を守る為、それを奪う悪と戦う正義の戦士……仮面ライダー、ブラァックッ!!」
それは、『創世王』を目指す前の呉島新が目指した「〝個性〟に苦しむ人々の希望の象徴」を体現し、呉島新が改造された時と同時刻に、密かに生まれたイナゴ怪人。
そんな正義の心を宿したイナゴ怪人は、自身の創造主が『創世王』となるのを止める為、与えられた「強化服・零式」を身に纏い、自らが『仮面ライダー』となる事を此処に宣言した。

●●●

「……始まったか」
「？　どうしたの？」
「何でもないよ。エリ」

――完――

Ｑ…もしもシンさんが、ダークサイドに身を堕としていたら？
Ａ…おめでとう！　イナゴ怪人ＢＬＡＣＫは、仮面ライダーＢＬＡＣＫに進化した！